

人文会 NEWS

2013.4

no.

115

—書店現場から—

くまざわ書店チェーン本部に聞く……森岡葉子・栗原真未 1

INTERVIEW

十五分でわかる仏教心理学……葛西賢太 15

ブックツリーズを通じて

図書館を核としたまちづくりを考える……内野安彦 32

—変化の中にある出版流通—

トーハンの取り組み……倉根智男 45

日販が取り組む出版流通改革について……駒村一雄 49

戦後史の中の英語と私

鳥飼致美子 同時通訳者としての活躍、英語教育での奮闘、通訳翻訳学樹立への情熱。挑戦の軌跡をたどる自伝。 五〇〇円

日本の2000年 新版 全2巻

ゴードン ロングセラーを改訂増補。アジアの視点を強化、三・一一以後まで論及。 森谷文昭訳 上三六〇円 下三六〇円

気候変動を理学する

多田隆治 古気候学の最新の成果が地球の見方を変える。気候変動の本質に迫る、サイエンスカフェ発の名講義。 二五〇円

こわれがめ 付・異曲

クライスト 善と悪の認識を描きざる、破滅的生涯の晩年に書かれた〈喜劇〉 新編集。山下純照訳 〈大人の本棚〉 二五〇円

みすず書房 (税込)

東京本郷 5-32-21 <http://www.msiz.co.jp>

私の人生の年代記

ストラヴィンスキー自伝

ストラヴィンスキー 著／笠羽映子 訳

〔転換期を読む16〕『春の祭典』で知られる異才がその半生を語る。音楽との出会いから、戦争と革命の衝撃、ディアギレフ、ニジンスキーなどの創作の日々、世界を駆けめぐる演奏旅行の幕開けまで。 ◆2310円

ルーヴル美術館の闘い グラン・ルーヴル誕生をめぐる攻防 ジャック・ラング 著／塩谷敬訳

「ルーヴル宮大改造計画」の渦中においていかなる発揮されたある政治家の手腕と冒険的試み、それは文化大臣ラングが先見の明・決断力・実行力をもって成し得た一大事業である。ガラスのピラミッドをめぐる、美術界、マスメディアをはじめとする反対運動との熾烈な攻防戦。 ◆2625円

書簡で読むアフリカのランボー 鈴村和成 著

天才少年詩人として一世を風靡したあと二十歳代からアフリカの砂漠地方で一介の商人として短い一生を終えたランボーの類いまれなる評伝。「詩人をやめた」あとの後半生を、母や妹、友人、商人などに宛てたいわゆる「アフリカ書簡」を縦横に読み解きながら、詩人の知られざる行動の実態を探り、ミステリアスな側面を描き出す。 ◆2520円

※表示価格は税込

未来社 〒112-0002 東京都文京区小石川3-7-2
tel.03-3814-5521 www.miraisha.co.jp/

〈沖縄〉

基地問題を 知る事典

前田哲男・林博史
我部政明 編

沖縄返還・領土問題・普天間基地移設・オスプレイ…。基地に関する四〇のテーマを平易に解説する！ 2520円

いま、日本人にとって神社・神道とは？ 3990円

事典 神社の歴史と祭り

岡田莊司・笹生衛編 厳選した六十社が映し出す人びとの営みと信仰。祭りや年中行事一覧など、付録も充実！

吉川弘文館

東京都文京区本郷 7-2 / 電話 03-3813-9151

論理の導くところへ——新シリーズ刊行開始

古田武彦・歴史への探究

四六判上製
各3150円

古田武彦著 古田武彦と古代史を研究する会編 三冊

多岐にわたるその思索の軌跡をテーマごとに集成。

① 俾弥呼の真実

② 史料批判のまなざし

③ 現代を読み解く歴史観

ミネルヴァ書房

〒607-8494 京都市山科区日ノ岡堤谷町1
TEL.075-581-0296 価格税込み／宅配可

書店現場から

くまざわ書店チェーン本部に聞く

INTERVIEW

森岡葉子さん、栗原真未さんくまざわ書店

「人文会ニュース」第一・一三号で紀伊國屋書店の専門書MD・吉田敏恵さんのお話を伺ったのを承け、今回はくまざわ書店の人文書、専門書に対する取り組みを取材させていただいた。対応は、本部営業推進部の森岡葉子部長と入社二年目でイーアスつくば店と錦糸町店を経験してきた栗原真未専門書担当のお二人。二〇二二年十一月三十日午後、くまざわ書店八王子店本部にて

くまざわ書店と人文書

—— よろしくお願ひ致します。あらかじめお送りしました質問事項に沿って聞かせていただければと思います。まず、現在くまざわ書店さんは全国に何店舗あるのでしょうか。

栗原…212店舗です「注：平成二十五年一月二十日現在」。

—— 人文会では、6年前にくまざわ書店さんと勉強会をやらせていただきました。その頃からアカデミアと呼ばれる店舗ができ、人文書、専門書に力を入れるチェーン店さんというイメージが生まれました。くまざわ書店さんとして専門書に力を入れようというきっかけ、あるいは紀伊國屋さんが「じんぶん大賞」をやったり、啓文堂さんが「啓文堂大賞」をやったりして、売り場を活性化しようとする取り組みを始めていますが、くまざわさんは人文書ジャンルで何かする予定はありますか。

森岡…そんな力はうちにはまだまだないです。いろいろ蓄積しながらです。

——でもチェーン店別POSを見ますと、もうダントツじゃないかと思えますよ、くまざわさんで売れたときのボリューム感は。

森岡…そうですね、ただまだ幅はまだ狭いと思います。単品で追求して猛烈にやることはあるけれど、お店でいろいろな商品が揃っている中というところ、まだまだ勉強不足だし、品揃えもできていないと思います。

——まずは人文書をこれからもしっかり売っていくことが重要な柱の一つである、ということですね。

森岡…そうです。

商品手配と書評棚

——人文書、または専門書全体でもいいのですが、仕入に

関しては新刊、既刊を含めて本部で手配しているのでしょうか。

栗原…新刊は、いくつかの版元さんにはこちら（本部）に来ていただいて、どこの店にどのくらいの新刊を付けようというのは定期的に話し合っているところもあります。既刊書についてはほとんど手が入れられていないという状況で、既刊書の追究については、まだ本部としてもお店としても不十分だと思います。

——お店によつては常備でメンテナンスができている場合もありますが、常備を入れていない店舗は開店のときに入った本がそのままになっていて……。

栗原…それがそのまま回転しているだけになっているのもありそうです。

——常備に関しては、各店の判断で取る、取らないを決めているのですか。

森岡…いえ、本部一括で。

—それは常備政策、常備比率を考えて、ということですか。

森岡…店の規模と坪効率とで店のタイプを分けて決めています。今まさにそれをやっているところです。

—常備をバランスよく取るというのはとても大切なことですけど、常備外や常備をやっていない版元の本をいかに店舗にあつたかたちで抬い上げていくかというのも必要ですね。専門書は棚から売れる比率が高いですからね。では新店のオープン時の書目はどのように決めているのですか？

森岡…以前は各版元さんに何百冊入れてくれ、基本図書を入れてくれ、というやり方をとっていたのですが、今は単品で選んでいます。うちのPOSデータとトリーハンさんからいろいろなデータをもらっています。

—新刊・既刊書にしても、書評が出た後のフォローを中

心に、くまざわ書店さんは非常に売り上げを伸ばしていると聞きますが、本部から全店へ指示しているのですか。

栗原…そうです、本部として事前に情報が入っているものについては、その都度、店ごとに、この店、この大きな店ならばこれくらいは揃えたほうがよい、というリンクを付けて、店に情報を発信しています。書評が出た後も、あらためて一覧にしたものを店に流して、揃えなさいと指示していますし、動きの出たようなもので少し追加した方がよいというものに関しては、本部から版元さんに直接電話をかけて「何冊ください」というフォローをする場合もあります。

—版元によつては在庫の関係で希望部数を出せない、ということもあると思いますけど。

森岡…「10冊だけ出して」と言うこともあります。10店舗に1冊ずつ入れるから10冊だけ出してって。

—くまざわさんのお店を訪問すると、書評棚が作られて

いますが、その売り上げはかなりよいのでしょうか。

森岡…その売り上げだけをとったことがないのでわからないですが、お客さんはかなりついてくれているはずです。日曜日に行くと必ずお客さんが立っていてくれるお店がいっぱいありますので。

—そうですね、お店を廻っていると売れてしまつてまだ補充が入つて来ないというアイテムや、スカスカになつている棚を見ますので、売れているのだな、というのはわかります。やはり始めて5、6年、もつと経ちますが。

森岡…全店でしっかりスタートできたのは、5、6年かな、私がここに来たときからそういうコーナーを作ろうってことを始めたので。

—はじめは本部の指示ですか

森岡…基本は本部の指示です。書評の本を集めよう、というところからスタートしています。

—書評に取り上げられた本は、それなりに評価された本ですから、棚に残すという判断にもつながりますね。

森岡…そうですね。

新刊・既刊の情報収集

—版元さんとの定期的な新刊の打ち合わせというお話がありました。が、何社くらいとやられているのですか。

森岡…定期的に来ている版元さんは、人文系の版元さんだけで10社くらいじゃないでしょうか。

—あとは、メールやファクスのやりとりですか。

栗原…そうです。

—くまざわさんの本部に来ない、案内を送つて来ない版元が面白い、売れそうな本を出すことも多いと思いますが、それらの事前の新刊情報収集はどのようになっていますか。た

たとえば、新刊案内を多くもらって見るようにして、これだと思ったら栗原さんからその版元に電話を入れるとか、そういったことはしているのでしょうか。

栗原…あまりしていない、というのが正直なところですが、完全にしていないというわけではないのですけど、何年かの取り組みの中で、本部として取り組みたいという版元さんを中心に、新刊はきちんと揃えようということになっています。それ以外の版元さんには手が回っていないです。

——くまざわさんとして、この版元の本はしっかり揃えて、新刊の時からきちんと置きたいところから、まずはフォローして配本してもらうということですね。

栗原…そのほかの版元さんの商品については、現状では店でやってもらえないかなと、正直思っています。

——たとえば、トーン週報等を見て、当たりを付けるといった方法もあると思いますか。

森岡…切り抜いて渡しています。(笑)

栗原…そういったことでこちらから版元に電話を入れて指定をかけることはありますが、そう頻繁にはしていません。

——今、取次はパターン配本の数を少なくしているようなので、いかに事前に情報を得て、これと思った商品がある時は、本部がチェーンとして部数をどれだけ確保できるかが大事になってくると思います。人文会会員社の来月、再来月の新刊の情報交換、これくらいの配本になります、というやりとりは歓迎していただけるのでしょうか。

森岡…前、うちと人文会さんとでそれをやりませんでした。五、六年前に勉強会をやった頃、人文会の新刊情報だけ集めて、毎月3点くらい各社さんからまとめたもののエクセルデータが来ていました。いつの間になくなっちゃいましたね。

——当初その試みでしたけれど、その後会員社の個別で案

内という形になってしまいました。人文会会員社の新刊が

集約されているというのは使い勝手がいいですよ。その中から面白そうな本をピックアップすればいいのだから。去年、人文会で「人文書販売の手引き」という冊子を作りました。その中で基本図書を、人文会の会員社が非会員社にかかわらず、各ジャンル100冊ずつ挙げてあります。その中で人文会の会員社の本がどの程度挙げられているかを調べてみると、だいたい4割くらいでした。20社を追っかけていけば4割くらいはフォローできることになります。新刊の情報収集という意味では、20社をまとめればだいぶ作業の軽減にはなるかな、と思います。いま、紀伊國屋さんの営業部向けに、人文会の会員社の新刊案内を同じ袋に入れて毎月お送りしています。それを見ていただければ、4割は作業の削減につながるかな、と思います。それはやっかいではないですよ。ね。

栗原…その時間を設けます。集中して見たほうがいいと思いますので。

—— たぶんその20社で新聞書評の専門書はある程度カバー

できるはずですよ。

森岡…そうですね。

本部の役割、そして現場

——くまざわさんは店舗の規模によって指定配本のランクを緩やかに設定されていますが、そのランクは随時見直しているのですか。

森岡…随時というか、ある程度決めています。商品によつては小さいお店でも、例えば田園調布店などには、そういう本を買いにくるお客さんがいるのではないかとと思われる店舗なので、専門書の版元さんの本でも配本を付けようという感じですよ。

——ランクをいじるのではなく、商品によつて、その店の特性、性格や環境によつて考えていくわけですね。

栗原…作者の方がお住まいになっているところの店舗に

は、厚めに付けたりするとか。

——例えば田園調布店に本部として5冊付けたとしますよね。5冊付けましたよ、ということは田園調布店に連絡はいくのですか。

森岡…連絡が行くときと行かないときがあって、店着してからそういう情報を流すこともあります。それとは別に、この商品は売れていますとか、この新刊が入りますよ、こういうところに並べてください、という連絡は毎日やっています。

——この本は本部が指定をかけたというのは、店舗は入荷時にわかるのですか。

森岡…本部一括の商品はトーハンさんから納品される時に分かるようになっていきます。

——本部指定のアイテムは毎月かなりの数になるのですか。

栗原…その都度、異なります。

——指定をかける場合は、各店舗の希望数をあらかじめ聞いて、その部数を配本しているのですか。

栗原…ものによってはこれくらいでどうでしょう、と提案するときはあります。

——栗原さんは人文書専門ですか。

栗原…専門書という括りをすべてやっています。人文書、理工書、専門資格、法律経済、看護、介護、時事的な堅いものも。

森岡…例えばIPS細胞というテーマが挙がったら、彼女が全部商品を選定して、各店に並べるように指示する、という感じですよ。

——では、そういう場合どんなツールを使って調べるのですか。

栗原…まず、うちのPOSデータを見て挙がってきて

いるものを中心に、iPSだったらノーベル賞受賞のニュースが盛り上がったときは全店でコーナー化しなければいけないだったので、売れ数の多いものから大型店に一冊あればいいだろうというもので、POSを見て、優先順位をつけて揃えるべき一覧にします。あとはトーハンさんのeihonというサイトがありますが、そこを見てどんな商品があるのかを見たり、アマゾンのサイトを見たりして、商品を入れるかどうかは別にしても、選ぶためにどれくらいアイテムがあるのかを見て、それからピックアップします。

——今でこそ多いでしょうけど、iPSだけではそれほど引つかからないから、検索語を変えて……

栗原…いろんな角度から、ただ新刊を中心ということになります。

——新刊を中心に本部でリストアップするということです
が、人文書や専門書の新刊とはどれくらいのスパンを考えて

いますか。

栗原…人文書に関しては、定番書、ロングテール本だったら、20年くらい前に刊行されたもので今でも読みつがれているものはいくらでもあるので、いつごろからのものというのは何とも言えないと思います。

——そう言っていたら、非常にうれしいです。今、二〇一二年ですが、07年や08年以降のものくらいしか揃えていない、見ていない方もいるようなので。別に一九七〇、八〇年代の本でも今でも売れているものつくらでもあるので。刊行順にソートをかけてしまつと下の方にいつてしまつて、なかなか目に留まらないことがあります。

森岡…そうですね。うちの社長もよく言うのですが、版を重ねているかどうかをよく見なさいと。返品するときはそのをよく見なさいって言われます。その通りだと思います。

——そうやって作業していただけると、専門書版元として

は非常に助かります。

森岡…半分くらいは機械的になってしまいますけれど。

—そういった本を常備という制度を使って、いかに適切に拾っていくか、常備を適切に取るということで既刊書の掘り起こしにつながり、バランスよく常備を取り、新刊書とどうからませていくか、ということは昔も今も常に大きなテーマだと思っています。なかなか上手くはいきませんが。ところで森岡さん、栗原さんは定期的にお店を回っていますか。

栗原…仕事として回るといえるのはなかなかできないですけど、近いうちや土日に出かけたときに他店を見て回ったりはします。行動範囲が限られてしまうのですが。

—ルーティンとして、たとえば東北の店を2、3日かけて見て廻る、ということは特にないわけですね。確かにここ本部にいて情報を集約して各店に流すというのも大事な仕事で、ここをしょっちゅう空けているわけにもいられないでしょうから。他社の何人かのMDの方の話を聞く機会があつ

て、現場の担当者といかに良い関係を作るか、基本的に現場の担当者に頑張ってもらわないと現場も本部も元気が出ないね、ということをお聞きするのですが、栗原さんはこの関係についてどのように思っていますか。

栗原…現場と本部の関係ですね。

—そうです。

栗原…おっしゃる通りというか、現場も本部も頑張らなきゃいけないのは確かだと思います。私は情報を流すばかりで、逆に「これが良い」とか「売れてきています」「うちでこれくらい売れているのだから、ほかの店でも売れるのではないですか」という情報がすごく欲しいのですけど、なかなか返ってこないです。

—それはフィードバックのツールがあるにもかかわらず、返ってこないということですか。

栗原…メールがあるので本部あてに送るといことはで

きます。自発的に本部に情報をくれる店は限られています。いろいろな店から情報は欲しいです。

——そういう情報は欲しいですよ。指定して送った本が実際に売れているかどうか、確かに端末で確認はできるのでしょうか、生の声を聞きたいですよ。

栗原…POSで見ると売り上げの高いものから見ることになるんですけど、全店で一冊しか売れてない商品でも重要なものがあつたりすると思うのです。それって現場の人しかわからないことで、その情報が欲しいです。ほとんど入荷していなくて、入れれば必ず売れる、という情報をおかなり見逃しているのではないかと思っています。たとえば二一二店舗あるのですが、そのうち全体で20冊しか入っていないくて、出た瞬間に18冊売れたものって、なかなかPOSには挙がってこないのです、私の目だけでは追いきれません。そこは現場の人が知らせて欲しいですし、情報が欲しいです。

——メールだけじゃなくて、掲示板みたいなものはないの

ですか。

森岡…それ以前に、お店のスタッフがそういう本が探せていないのだと思う。今日一冊入って来て今日一冊売れた、ということに気がついていないのだと思います。そこまでレベルの高い人はそんなに多くないので。やっぱり店を集中してね、毎週月曜日にここで打ち合わせをしているのですが、八王子店の情報を提供するということはやっています。例えば、文芸書でものすごくその日一日で売れました、という情報はあがってきます、そういうのはわかるのだけど、今日一冊入って来て棚に差したら今日売れた、ということに気づける人って、その本に注目していれば気づくと思うけど、なかなかレベルがそこまで達していないと思います。

——たとえば、本部で100冊仕入れて全店に指定配本をしたとしますよね、その後、一ヶ月後、二ヶ月後、その本がどの程度売れているか、という検証はされているのでしょうか。

栗原…見るようにはしてありますけれど、あまりに一括している数が多いので、ピックアップしたものしか見ていないというのが現状です。

——指定を多くかけたり、気になる本のチェックをするくらいしかできないということですね。はじめから注目していたり、心に引つかかったものだと後から検証やチェックしやすいですけれど。

栗原…そうです、私自身が気になっているので。

——本部やお店でノーマークだったものが、実はひそかに売れていてもなかなか気づけないでいるということですね。

栗原…そうですね、気づけないでいると思います。

——そうすると後は、われわれ版元が営業に行ったときの会話の中で引つかけてくれるかどうか。実は売れているのですよ、という会話から本部にさらにフィードバックされてくると、チェーン全体としてもさらに売れるようになるで

しょうね。

栗原…そうです。

——くまざわさんだけじゃないですけど、書店を廻っていると、一冊入ってきてその一冊が売れて、返品しないよかった、という安心感に浸っている書店の方が結構多いようです。ああ売れてよかった、という感覚です。営業ですから、そんなに早く売れたなら面陳したり積んだりしてもっと売ろうよ、って思つのですが、なかなか冒険してくれないですね。

専門書の棚作り

森岡…今、コンピュータ書と理工書は勉強会をやつて棚プレートの見直しをしています。それで、人文系のものも棚プレートの見直しをしたいというのはあります。それにいろいろご協力いただけると。うち、棚プレート少ないのですよ。もっと細かいものが欲しい。

——さつき話した「手引き」の中ジャンルが棚プレートと

して考えて作ってあるので、参考にさせていただけたらと思います。あれで多いのか少ないのかは、店によってだいぶ違うでしょうから、もし足りないようであれば相談していただければもっと細かくすることはできるし、もっとカットすることもできます。また、人文会はいろいろなチエーン店さんと勉強会を企画してきましたので、五、六年前にやって以降、会員社の担当もずいぶん替わっていますし、くまざわさんも人文書、専門書を担当されている方があの頃とは替わっていると思いますので、そろそろ勉強会をやりたいですね。

森岡..そうですね、かなり入れ替わっていますから。

——たとえば、ここのジャンルを集中的に、というのはありますか。

栗原..全体的に、ということになります。このジャンルということよりも人文書という大きい括りでどういうふうにどんなものを並べていくのかというのを、細かくではなく、大きな枠組みから、まずは棚プレートの見直しから始めたいと思っています。取り組みがもっと強化さ

れて進化したら、このジャンルを強化していいこうという話になるのかなと思います。

——現場の方のスキルアップがある程度したら、ということですね。

栗原..そうですね、あとは現場の担当者の興味ということもあると思います。

——そうですね、ある程度、知識がついてくると自分はこのを伸ばしたいとか、この店ならここを伸ばせるとか出てくるでしょうし、それが出てきてはじめて楽しくなると思うので。そのあたりはまた別途ご相談いただければ、むしろ最初のいろはからです。

森岡..勉強するためのツールが欲しいです。

——いま使っているジャンル分けはトーハンさんが設定したジャンル分けをほぼそのまま踏襲しているということですが、たとえばそれをくまざわさん流に書き直すことはできる

のですか。

森岡…書き直すことができるかどうかはわかりませんが、変えていかなくてはいけないという考えは、うちの専務にもあります。

—ある新刊が出ました、それが店に納品されて来ます。その時点でトーハンジャンルが書き込まれているのですか。

森岡…新刊の時点では書き込まれてはいないです。書き込まれているのは、補充されてからです。

—新刊時は何もないけれど、補充されてくるとトーハンのジャンルが書き込まれて納品されるということですね。

森岡…補充用のスリップが入っていて、そこにジャンルというかコードが書き込まれて入ってくるということですね。棚プレートにもコードが入っているのです。この場所に入れる、誰でも品出しはできる、けれども本当にそこでもいいのかな、というのはいっぱいある。

—イーアスが開店して数ヶ月経ったとき、担当者から見直してくれませんか、という電話をもらったのを思い出しました。書店を廻っていると、なぜこの本がこの棚に置いているの、ということがあります。お店の人が考えて置いているということはもちろんあるでしょうけど、どうみてもどうしてここに置かれているのだろうか、という場合があります。、おかしいって気づかれているのだったら、改善の余地ありということで期待したいと思います。できればくまざわさん流で書き替えて欲しいと思います。各社の新刊案内にはジャンルが書かれてありますから、見直すときの参考にしていただけなら、版元はこういうジャンルを付けていたのだと見てもらえると。

最後に、くまざわさんの大型店以外でお勧めのお店がありましたらご紹介ください。

栗原…沖縄に行ってください、是非。球陽堂書房さんがすごいです、本当に。（注：二〇一二年八月にくまざわ書店が沖縄の球陽堂書房の株式を一〇〇%取得した。）

森岡…岩波さんの『世界』を一番売るのですもの、くま

ざわの中で。たまたまこのところ尖閣や中国の問題があったからかもしれないですけど。リニョールしてさらに売り上げが伸びているようなので。フォローすればもっと伸びるのではないかと思います。

——沖繩に注目ということ、かしこまりました。では、このへんで、ありがとうございました。

十五分でわかる仏教心理学

葬儀や法事の折に寺院を訪れて意味不明の読経につきあうぐらいしか、仏教との接点は持たない、という人もふえました。それどころか、葬儀さえでたことがないという学生がずいぶん多くなっています。多くの日本人にとって、心理学は現代的なもの、それに対して仏教は仏像などのような過去の文化遺産にすぎないもの、あるいは、あのお経になにか効力があると信じている奇特な人々のためのものなのでしょうか。

仏教は宗教の一つで、仏や来世や浄土の存在を信じる非合理的なもの、という型にはまった発想を、一度棚にあげてみてください（信じている方がそれをやる必要はありませんが、いったん休んではいかがでしょうか）。むしろ、仏教が合理的に人間観察をするという面に注目しま

す。たとえば、神秘体験は体験者の心の表れである、という無神論者の主張のような内容が、『般若三昧經』という經典にどうどうと書かれていたりするんですよ。

さて、これからお話しようとする仏教心理学とは、仏教の新しい見方です。学問としては発展中（仏教心理学で博士号をとれる大学は国内にありませんし、仏教心理士などという資格もない）ですが、仏教と心理学とが出会うことで生まれた、グローバルな運動です。仏教にも心理学にも、合理的な人間観察をしようとする立場と、それでは人間を浅く捉えるだけと考える立場とがありますが、それらが拮抗しあうところに発生する運動です。この運動は、（一）心の探究への関心、（二）心の治療への関心、（三）心の理論・思想への関心を中核に、平和作りや社会改革

葛西賢太

に関わるなど、多くの人々をネットワークにします(学問上の位置づけに関心のある方は、拙論「運動としての仏教心理学」『日本仏教心理学会誌』2、二〇一一年をお読みください)。

そんな仏教心理学の一端をご紹介します。仏教ではどうやって人間観察をするのか、そこからどんな学びが得られたか、それはわたしたち現代人にとって何の役に立つのか、そして仏教の学びに現代の心理学・医学などからどんな修正が加わるか、仏教からは何を提案するか、そうしたことを、これから、お話ししたいと思っています。その際、以下のキーワードを掘りさげて確認する、というやり方をしてみましょう。キーワードとは、人間としての釈迦、利己と利他、マインドフルネス、諸宗教の出会いと混淆、ヒューマニズムと弱さとスピリチュアリティ、です。

仏教のもととなった人間観察を行ったのは、北インドに生まれた釈迦という人物です。彼は、他人を観察するとともに、さまざまな体験を通して、自分自身の心身を深く観察しました。彼と、彼に続く人々の観察が、仏教の中核をなします。彼の生涯から、お話を始めましょう。

人間としての釈迦

釈迦(ゴータマ・シッタッタ)は、インドの小国の王子として誕生しました。この国は合議を重視した共和制的な政体をとっており、大国コーサラ国の庇護下にあったようです。当時のインドは大国マガダ国が抬頭し北インド広域を支配する前夜ですから、大国には生まれた小国ゆえの運営の難しさを、釈迦は予期していたと考えられます。彼の誕生と入れ替わるように母親が没したのですが、このことは、その後釜に入嫁した叔母による温かな養育にもかかわらず、彼の心に陰影を落としたのでありましょう。自分の誕生が母親の生命を奪ったのかもしれない、こうした彼の罪責感、現代人でも理解できることです。沈黙考・瞑想が日常に重きをなしていた、考え込みがちな子供であったことが想像されます(なお、亡き妻の妹と再婚するというのは日本的には抵抗があるかもしれませんが、財産を小分けしすぎないという意味があります)。

幼き日に彼が王族として参加した農耕祭の現場でちょっとした出来事がありました。掘り起こされた土から虫が出てきて、それが鳥に食べられ、その鳥がさらに

大きな鳥に襲われるという情景を、みなで目撃したというのです。みなはがやがやと驚きを口にしただけだったのですが、彼は深い瞑想に入ってこのことを省察したと伝えられています。

やがて、二九歳の青年釈迦は家族を捨てて、インドの修行者たち——沙門——の伝統に加わります。彼の目的は人生における苦の根本的解決であったとされています。最初は瞑想を極め、のちに苦行を徹底する六年間を経て、無為の安逸でも苦行による身体破壊でもない中道の境地を瞑想にあらためて見だし、「悟り」を得ます。

心におこる諸現象の徹底した観察を基盤とするその「悟り」の内容を、釈迦は吟味し確認しますが、当初これを伝道する意図はなかったようです。梵天が説法を請うた（と伝えられる）出来事がきっかけとなり、釈迦は旅をしながらかつて語り手を探すこととなります。広がりつつあった貨幣経済に助けられ、都市の間を移動して人々に説法し、都市やその近郊の有力者・富豪、そして諸国の王族の支持も得たでしょう。出家して釈迦の弟子となるものもいたでしょうが、釈迦の説法に強く感銘を受けつつも、出家はせずに、生業を継続することを決めた都市

住民も多かったはず。都市の商人のなかに多くの在家信者が生まれました。

釈迦は長命で、四〇年を超える説法を続けて教えを広めました。その間に、愛弟子の早世や一族の殲滅といったつらい事件にも出会うことになりました。悟ったあとの釈迦が、苦しみや悩みとは無縁の「悟りすました余生」を送ったのではないことは、これらの事件からもまた、「律」の記述から読み取れる弟子たちのさまざまな不始末からも、うかがうことができます。

経典と言葉を伝える

釈迦の説法は誰のものでしょうか。生産活動を手放し修行に明け暮れる出家者のものでもあるが、同時に、仏教は当初から、働く時間と自己覚知をする時間とを切り替える在家者のものでもあったはず。力をつけつつある都市の商人たちの支援は仏教教団にとって欠かせないものであったはずですから、出家者と在家者との共働は、とうぜん重んじられてきたでしょう（原始仏教教団における在家者の役割に興味をお持ちの方には、たとえば佐々木閑『出家とはなにか』〔大蔵出版、一九九九年〕、グレゴリー・ショ

ベン『大乗仏教興起時代 インドの僧院生活』(小谷信千代訳、春秋社、二〇〇〇年)をお薦めしておきます)。これらから、独得だが理解可能なロジックに触れると、現代の在家者が、心理学的教訓を読み込むことも許容されると感じます。

釈迦の没後、その教えは口誦の詠み合わせによって確認され、文字がなかった時代なので暗唱されて後世に伝えられます。そのため經典の冒頭には「如是我聞(私はこのように聞きました)」などの句が共通して入っています。まみえることのできなかった釈迦に会いたいという願いは、遺骨を納めた塔に向かって礼拝する習慣を経て、釈迦の姿を像に刻む習慣へと結実します。パーリ語での經典の文字化も、仏像制作の開始も、釈迦没後数百年を経ておきますので、釈迦の言葉やその姿を正確に復元することには一定の限界があることに注意せねばなりません。釈迦が使っていた言語は、經典表記の言葉であるパーリ語ではなくマガダ語ということですので、翻訳という壁も越えねばならなかったのです。

キリスト教の言葉と比べてみますと、イエスが使っていた言語はアラム語で、新約聖書はギリシャ語で書かれました。同じことが起こっていたわけですね。それにし

ても、翻訳の苦心を越えて、また真剣に記憶し、文書を命がけで運んだ人々の労苦を越えて、現代に至るまで言葉が伝えられていることに、深い感慨を覚えます。

日本に釈迦の言葉が伝わるまでには、多くの人々の手を経てまいりました。高僧やすぐれた実践者の深い解釈も加わり、また、地域の宗教実践と結びついて、あるいは国教化とともに国家権力にあわせる制約も経るなど、変容を遂げ、仏教經典も膨大な量になりました。現在、日本人が仏教としてみているのは、釈迦の言葉より大幅に拡張されたとされる大乗仏教なのですが、これをどのように位置づけるべきでしょうか。拡張された部分を「非仏説」として、単純な原点回帰を唱える立場もありますが、信じている多くの方がいるのですから、これらの拡張の中身を吟味して、釈迦の言葉の広がりとして用いていくべきだろうと思います。(大乗仏教は非仏説)などの批判を越えて、日本人が持っている仏教を正面から吟味することを説いた平易な本として、正木晃『お坊さんのための「仏教入門」』(春秋社、二〇一三年)があります。

かつて仏教の教えを深く学ぶには、よき師につくか、翻訳されていないものを漢語から苦勞して学ぶ必要がある

りました。難しい漢語で読むよりも英語の方がわかりやすいこともあったぐらいです。でも、既存の經典に平易な新訳もあらわれてきました。世界は狭くなり、仏教を実践する人々は、インターネットなどの新たな絆でもつながるようになりました。上座部仏教の瞑想合宿が、その方の信条・信仰とは独立に、日本でも欧米でも行われています(“meditation retreat”で検索してみてください)。これらの合宿の案内では、仏教徒になる必要はないと強調されています。欧米の実践者たちは、宗派に忠実な信者というより、禅やチベット仏教や上座部、ピラティスやヨーガや氣功や太極拳と、あるいはイスラームの旋舞瞑想やお念仏やお題目さえも自由に組み合わせ、心身の健康やリラクスのために行っている人も多いようです(さまざまな健康法の実践状況をみた米国立衛生研究所の二〇〇七年の調査では、過去一年間に一回でもなんらかの瞑想を行った米国人は二〇〇万人ほどと推定されます。拙著『現代瞑想論——変性意識がひらく世界』(春秋社、二〇一〇年)をご覧ください)。ある種の心理学的体験をするための実践とみられているのです。

利己と利他

釈迦自身の深い自己観察と、それを受けて、瞑想で弟子たちが自己観察をしたことが、經典には記されています。經典の内容をまったく知らない読者、經典が理解可能なものであることを知らない読者もおられるはずですので、その中身をちょっとだけご紹介し、これがある種の心理学と言えることを確認したいと思います。

たとえば、經典としては最初期の、もっとも釈迦の没後に近いものとして重視される『ダンマパダ』(日本では『法句經』と呼ばれる)は、力強く洞察的な警句に満ちたものです。たとえば以下の引用は、『ダンマパダ』の内容がある種の心理学であることをはっきりと示しております。

ものごとは心にもとづき、心を主とし、心によってつくり出される。もしも汚れた心で話したり行なったりするならば、苦しみはその人につき従う。車を引く(牛の)足跡に車輪がついて行くように。……もしも清らかな心で話したり行なったりするな

らば、福楽はその人につき従う。影がそのからだから離れないように。

『ブッダの真理のことば・感興のことば』中村元訳、岩波文庫、一〇頁。

どうですか。気の持ちようが現実をかえる、という洞察は、現代心理学者やビジネス書の著者たちの専売特許ではなく、すでに釈迦によって語られていた智慧でもあるのです。

以下の、王と妃の語り合いの場も、現代にも通じる深い洞察を含んだ、『相應部』などと呼ばれる古い經典の一節です。

ある日、大国コーサラ国のパセーナディ王が妃のマッリカーに尋ねます。「自分より愛しい人が誰かいますか？」おそらく王自身に対するロマンチックな答えを期待してこのように問うたのでしょう。妃は、「大王さま、わたくしには、自分よりもっと愛しい人はおりません。あなたにとって、ご自分よりもっと愛しい人がおられますか？」と、真っ正直に応えました。この世で一番大切なものは自分以外にあらうか、王様、あなたは

どうなのですか、と。王はこの問いを熟考し、「マッリカーよ、私にとっても、自分よりもさらに愛しい他の人は存在しない」と答えます。王はこの對話に深く感じ入り、釈迦を訪ねて語ります。釈迦は、それに対して、詩の形で応答します。「どの方向に心でさがし求めてみても、自分よりもさらに愛しいものをどこにも見出さなかった。そのように、他の人々にとっても、それぞれの自己が愛しいのである。それ故に、自己を愛する人は、他人を害してはならない」(中村元訳『ブッダ 神々との對話 サンユッタ・ニカーヤ』岩波文庫、一六九―一七〇頁を参照しました)

利己と利他が組み合わされたこの逸話、みなさんはどう受け止められますか。

宗教は善行を説き利他を目指すものであるという共通理解(たてまえ)があるいっぽうで、日本社会では宗教の社会活動が偽善ではないかと懐疑的に見られることも少なくありません。

仏教における修行は、利己、自分自身のためという一面を持ちます。釈迦自身が、自分自身の出生をめぐる悲しい出来事を、深く掘りさげるといふ課題を持っていた

ことを、冒頭で推察しましたね。そもそも自分自身に切実な課題なくして、瞑想や苦行の六年間に耐えられないのではないのでしょうか。……仏教徒の立場をとるならば、釈迦は悟りを得て仏になるという初志を貫ける超人だったとするところですが、ここではあえて人智を超えた要因は保留して、一人の人間として釈迦を見たいとおもいます。一人の人間としての苦しみのなから、どのような心理的過程を経て、その苦しみの原因を彼が見いだしたのか、苦しみはどのような心理的状态なのか、また、それをどのような苦しみを持つ人々に、どのように共感しつつ、どのようにして説いたのか。仏教徒という視点とはとらずに、一人の人間としてみてさえも、釈迦という人物の語りは味わい深く、その卓越ぶりは確認できるでしょう。

私には、この話が、他に献身するヒューマンケアの仕事をなしている人への助言のように聞こえます。たとえば教師、医師や看護師、介護の専門家や、家族の介護に取り組む方々など、ケアの専門家です。自分より大切なものはない、ということを抑えことなく確認し、それを他者に移し替えてみることによって、他の苦しみへの共

感や利他が生まれてくる。自分を大切にできない人間は、他人を大切にすることもできない。「利他」をスローガンとしてかかげただけでは、相手ののぞまないものを押しつけてしまうことになるかもしれません。利己を前提として利他が生まれてくるのが正しいのです。もちろん、利己にとどまらないことが、ここでは確認されています。

井上・葛西・加藤編『仏教心理学キーワード事典』（春秋社、二〇一二年）では、これについて二つの角度から説明をしています。仏教の利他の原理である四摂法と、心理学の利己の原理であるナルシシズムという、二つからです。健全な母子関係のなかで最初に全面的な世話を受ける側として育つこと（利己）は、利他の原点となるこの世界への基本的信頼を形成する上で欠かせないものです。

マインドフルネス

仏教がもとともある種の心の学であることはお話ししました。では、心理学の側からはどうみえるのでしょうか。

ユングが仏教やヨーガについて書いた論文をまとめた本に『東洋的瞑想の心理学』（湯浅泰雄、黒木幹夫訳、創元社

一九八三年)があります。この本に掲載されている論文は、チベットの死者の書や鈴木大拙を通しての禅瞑想論、観無量寿経に説かれる浄土の瞑想論、易を題材に共時性について触れた論文など、主として友人の訳書に解説や序文として寄稿したもので、一九三〇年代、一九四〇年代に書かれています。

仏教には唯識という体系がありますが、アーラヤ識と深層心理学における無意識とはしばしば比較して論じられています。たとえば、アーラヤ識はわれわれが眠って目ざめたのちに眠った時点から記憶をたどることができ、つまり意識が途絶えても継続されている無意識と同様のものと考えられています。ユングの「集合的無意識」と対応するアーラヤ識の「共業」など、発見があるそうです(William S. Waldron, *A Comparison of the Alayavijñāna with Freud's and Jung's Theories of the Unconscious*. 真宗総合研究所研究紀要7、一九八八年。Tao Jiang, *Contexts and Dialogue: Yogacara Buddhism and Modern Psychology on the Subliminal Mind*, Honolulu: University of Hawaii Press, 2006)。なお唯識一般の入門には、たとえば多川俊映『はじめての唯識』(春秋社、二〇〇一年)がおすすめです。英訳もされています。Charles A Muller, *Living Yogacara*:

An Introduction to Consciousness-Only Buddhism, Wisdom Publications, 2009.)。

心理学で何でもわかんと思うのは、ある種の思い上がりかもしれません。藤田一照『現代坐禅講義——只管打坐への道』は、心理学研究者でもあった曹洞宗の老師が、禅や気功や調息やヨーガの指導者と対談しながら、これら身体技法の共通課題を手がかりに禅を語る、たいへん面白い一冊です。

米国における心理学の祖とされるハーバード大のウィリアム・ジェイムズは、心理学の講義中に、スリランカから来た仏教僧ダルマパーラが聴講していたのを見つけました。ダルマパーラは一八九三年にシカゴで行われた万国宗教会議で著名になった人物でもありました。ジェイムズはダルマパーラを前に招き、あと二五年もすればみな仏教の心理学を勉強するようになる、あなたの方が心理学を教えるのにふさわしい、どうぞ自分の代わりに教壇に立ってください、と語ったとされます。実際には仏教心理学の広がりにはそれほど早くはありませんでした。仏教心理学が強い存在感を示すようになったのは、マインドフルネスというキーワードが、仏教の外側、特に

心理学や医学の領域になじむことによってでした。マインドフルネスとは、いまここでの自分の状態を実感するという課題が心をこめて行われていること、と言えるでしょうか。この言葉を広めた上座部系瞑想は、ボストン郊外の洞察瞑想(Insight Meditation)協会やカリフォルニアのスピリットロックを始めとして、米国では、各地で瞑想センターが広がっています(その様子は、たとえば洞察瞑想の草創期からの指導者であるシャロン・サルツバーグの『リアルハビネス——二八日間瞑想プログラム』(有本智津訳、アルファポリス、二〇一一年)や、ラリー・ローゼンバーグの『呼吸による癒し——実践ヴィパッサナー瞑想』(井上ウィマラ訳、春秋社、二〇〇一年)をご覧ください)。

なかでも特筆すべきは、マサチューセッツ大学医学部のジョン・カバットジンが、医学的治療や心理療法の現場に八週間の瞑想プログラムを活用して長期的な成果を上げていることです。彼が禅やヨーガや上座部系瞑想から学んで作り上げた、マインドフルネスストレス低減法(Mindfulness Based Stress Reduction)は、慢性的疼痛に対処する方法として用いられ、やがて摂食障害や高血圧などの心理的問題にも有効であることがわかって、

二〇〇万人がプログラムを受講し、いまでは保険の適用もあるのだそうです(カバットジン著『マインドフルネスストレス低減法』春木豊訳、北大路書房、二〇〇七年)。

カバットジンは治療効果のエビデンス(実証データ)を積極的に公開する努力を払ったため、周辺分野で次々と応用され、いまや、うつ病の再発を抑えるのに有効なマインドフルネス認知療法(Mindfulness-Based Cognitive Therapy for Depression)『マインドフルネス認知療法——うつを予防する新しいアプローチ』が北大路書房より第一版の訳が越川房子監訳で刊行されています)や、治療が難しい境界性人格障害に有効であることが知られるマリーシャ・リネハンの弁証法的行動療法(弁証法的行動療法実践マニュアル——境界性パーソナリティ障害への新しいアプローチ)小野和哉訳、金剛出版、二〇〇七年)などに応用されるに至りました。念のために申し上げておくと、マインドフルネス認知療法は、うつを治癒させるのではなく、うつを悪化させる原因である再発を抑えるため、マインドフルネスを自己状態認知と精神安定の両面において用いるものです。また、弁証法的行動療法は、禅的な受容を基盤に、患者に危険を乗り切るさまざまなスキルを習得させるといえるものです。認

知行動療法にはさまざまな方法論がありますが、それらは広範に仏教の瞑想法から影響を受けています。仏教からの影響も視野に入れつつ諸認知行動療法を俯瞰する本として、熊野宏昭『新世代の認知行動療法』（日本評論社、二〇一二年）をお薦めします。

脳科学のような学問は、仏教のしくみを解明してしまうのでしょうか。脳のここを刺激すれば宗教体験ができますよ、などといったかねないような脳科学「信仰」に対して、芦名定道・星川啓慈編『脳科学は宗教を解明できるか?』（春秋社、二〇一二年）は、関連諸学問の議論を網羅して、現時点での妥当と思える見解を提示しています。日本宗教学会での議論がもとになったものです。

こうした瞑想実践の効能として、脳にも変化が生じること（神経可塑性）が知られています。感情的な反射を司る扁桃体をおさえて、より落ち着いて考え行動すること促す前頭前野が肥大し、働きが強まるといいます。その成果は、たとえば米国ワシントン州の刑務所の瞑想合宿などに現われています。瞑想の習慣を身につけた収容者は、体操などの他の方法を行った収容者より、三ヶ月後にマリファナの再使用をする確率が大きく下がっています。

ます。また死刑囚が瞑想に取り組み、事件や自分の生涯を振り返る様子は *Dharma Brothers* という感動的な映画にもなっています。刑務所内でこれだけ体系的に瞑想を行うことは、現在の日本の法務省の管轄下ではまだ難しいかもしれませんが、大いに期待したいものです。

こうお話ししてくると、瞑想のやり方についての本も読んでみたくなるでしょう。日本語で説法するアルボムッレ・スマナサーラのたくさん本からは『自分を変える気づきの瞑想法』（サンガ、二〇一一年）を紹介しておきましょう。もうひとり、アメリカで活躍しているバンテ・ヘーネボラ・グナラタナの *Mindfulness in Plain English*（やさしい英語でマインドフルネス）というロングセラーは、学校教科書にも採用された懇切でいねいな実践的解説書で、その邦訳『マインドフルネス 気づきの瞑想』（サンガ、二〇一二年）をおすすめします。二人ともスリランカ出身ですね。

諸宗教の出会いと混淆

仏教が欧米において心理学と出会う、そのきっかけは、伝道はもちろんのことですが、それだけではありません。

(ケネス・タナカの『アメリカ仏教——仏教も変わる、アメリカも変わる』〔武蔵野大学出版局、二〇一〇年〕は移民や布教による米国での広がりを知るための好著です)。政治的な苦境が仏教にも影を落としてつ、仏教の力を引き出しているともえます。たとえば、チベット動乱で世界中にチベット僧が亡命したことや、チベットの法王であり国王でもあったダライラマ一四世を崇敬する世界中のシンパたち(読者もダライラマの笑顔を敬愛されるお一人かもしれませんね)がいます。チリの政変によって友人や身内が迫害を受け、深い苦しみを味わった神経科学者フランシスコ・ヴァレラは、その苦しみへの答えを求めてチベット仏教僧チョギヤム・トゥルンパに教えを請いました。ヴァレラは生命と外界がどのように境界づけられ生命が維持されるかをとらえたオートポイエーシス理論の提唱者でしたが、彼の理論は、仏教における無我・非我論(アビダルマという仏教の知覚心理学)、認知科学が到達した「自己は幻想である」という認識などと絡み合い、ダライラマ一四世の全面的な協力を得て、精神と生命研究所の活動に結実しました(フランシスコ・ヴァレラ他『身体化された心——仏教思想からのエナクティブ・アプローチ』〔工作舎、二〇一一年〕などをご覧ください)。

独裁政権下で人材が軍人か僧侶に集中する状況がミャンマーでの瞑想実践の活況を生みだし(仏教史の中での瞑想の位置については養輪顕量『仏教瞑想論』〔春秋社、二〇〇八年〕をご覧ください。ミャンマーの瞑想の実例としては、ウィリアム・ハート『ゴエンカ氏のヴィパッサナー瞑想入門』〔春秋社、一九九九年〕、マハーシ長老『ミャンマーの瞑想』〔アルマツト、二〇一一年〕などが読めます)、ミャンマーなどで学んだ欧米の瞑想指導者たちが次世代以降を育てている現状もあります。あるいは、ユダヤ人が、ユダヤ神秘主義(カバラやハシディズム)などの瞑想的伝統を持ちながら、コロコーストや移民を余儀なくされたためにそれらの伝統への接点をうしない、それらに代わるものを仏教のなかに見いだしているという様相もあります。

仏教徒であるユダヤ人たちはBuddhistなどと呼ばれます。彼らの仏教求道は決して片手間と言えるものではなく、むしろ、米国における仏教の重要な担い手となっています(禅やチベット仏教やヴィパッサナーなどの主要な師僧のほとんどはユダヤ系であることが、その姓をみると察せられます。物事に徹底して取り組む文化伝統がうかがわれます)。彼らは「ユダヤ教の根と、仏教の翼とを持って」と語って

います。(岩本明美「ユダヤ人とアメリカ仏教——仏法を愛するユダヤの民」『京都産業大学論集人文科学系列』四一、二〇一〇年。またRodger Kamenez, *The Jew in the Lotus*, HarperCollins, 2007.)

政治的苦境が、このように、仏教のポテンシャルを引き出し、他宗教と連繫したり、心理学的研究や実践をするのを深めたりしているのです。このポテンシャルは、宗派の違いや教義の差にとらわれていたら引き出せなかったでしょう。

かつて私たち日本人は、このような宗教の「混ざり合い」を低く見下してしまうところがあったように思われます。しかしこうしてみると、混淆はすなわち低級とはいいがたく、むしろ、高度な実践者と高度な実践との出会いがイノベーションを生む姿がみえるのではないのでしょうか。瞑想はそのような工夫が特にいかされやすい領域なのです。実のところ、こうした諸宗教の瞑想法の混淆の例は、歴史的にも枚挙にいとまがなかったのです。釈迦の瞑想はとうぜんヨーガの瞑想技術を前提としていたとおもわれますし(ただしヨーガの聖典とされる『ヨーガ・スートラ』の成立は実は仏教よりも遅れるようです)、道教の瞑想法は、仏教の強い影響、そして、仏教を介してヨーガ

などのインドの瞑想法からの影響を受けながらその体系を作り上げてきたことが知られます。仏教の瞑想の影響がイスラームのスーフィズムに及んでいるのかもしれない、ともいわれます。諸宗教・諸宗派の境界は、あまり厳密なものではなく、特に実践の現場においては混じり合い、学ばれあっていたはずです。それは、実践のかたちや道具を比べてみると、容易に想像がつくことです。

例を挙げれば現在の諸宗教の瞑想法を見比べると、観想法や呼吸法や坐法や唱えごと、さらには数珠のような道具などが共通していることに驚かされます。キリスト教にはロザリオ、イスラームにはタスビーフという大小さまざまな数珠があり、唱えごとの回数を数えるために用いる点なども仏教と共通です。

諸宗教の瞑想法の比較には、心理学という名前さえ冠していないものもあります。井筒俊彦『意識と本質——精神的東洋を求めて』(岩波文庫、一九九一年)は、私たちがふだん使っている言語や概念に縛られた意識を変容させ、(もの)の本質そのものを直接観る直観知を考え、それらが諸宗教でどう表されているかを時代や地域を越えて同じ平面に並べてみるものです。これまた宗教

や宗派にとらわれていたらできないものでしょう。井筒は哲学的思想的実践として、諸宗教の資料を読み込んでいくのですが、こうした方法は、諸宗教の神秘主義の比較研究で用いられていたのと共通するものです。仏教を諸宗教と比較する際には、共通要素を、普遍的な言葉で読みかえることになりますが、それは仏教を新しい視点から見ることにもつながるのです。

ヒューマニズムと弱さとスピリチュアリティ

仏教心理学とひびきあうヒューマニズム的な宗教観が、現代人の文化のあちこちに（しばしばかなり薄まって）広がっています。この考え方では、人間を超えたものを崇拜させたり、人間を超えたものになれると強調したりするような、濃厚に「宗教っぽい」ものは避けられます。人間としての釈迦、人間としての高僧が、弱さ（*fragility*）や傷つきやすさ（*vulnerability*）や欠点を持ち、苦しみ、にもかかわらず創意工夫して、苦を受け入れたりつきあったりする姿に焦点が当てられるのです。火のなかに入れられてもやけどせず、大切な人を喪っても動じない、などというのではなく、凡人と同じように凡人と一緒に

笑ったり悲しんだりし、本人以上に本人の抱えているものを察することができると共感の力（実はちょっと人間を超えているのです）を持ち、それを治療的に洞察して専門的な医療につなげることもできる。現代の欧米の瞑想修行者たちは、しばしば心理学・心理療法などの博士号を持っている高学歴の人で、同時にすぐれた共感能力を持った人間理解者でもあります。

英国の心理療法家であり、仏教心理学者であるデイビッド・ブレイジャーは、『フイーリング・ブッダ』（藤田一照訳、四季社、二〇〇四年）において、仏教における苦のとらえ方に新しい理解を提示します。一般には、執着をなくすことが苦をなくすことだ、そのように釈迦が説いたと考えられているでしょう。ブレイジャーは、釈迦の最初の説法をおさめたと考えられている『転法輪經』を読み直します。現実にある苦に対して、執着をなくせと釈迦は説いていないし、苦を感じざるを得ないことに對して恥辱感を感じる必要もない、これが釈迦の真意だとブレイジャーは考えます。苦を感じざるを得ない現実と正面から向き合うことは、神聖で高貴なことであるというのです。人間の弱さ、傷つきやすさ、苦しみを、感

じないように「強く」なり、「悟りのボーカルフエイス」

を保つことが大切なのではなく、むしろ感じつつそれに向き合うことこそが「フィーリング・ブッダ」というタイトルにもあるように、観察を旨とした釈迦の本来の意図ではなかったか、このように主張するのです。冒頭にご紹介した「人間としての釈迦」と重なりますね。

実は「宗教教団」のなかにも、スピリチュアリティ（霊性、精神性）などと呼ばれるヒューマニズム的人間観に染まっている人は少なくありません。たとえば島蘭進『精神世界のゆくえ——宗教・近代・霊性』（秋山書店、二〇〇七年）は、スピリチュアリティを標榜する運動全体を精力的に一望しその意義を評価しようとするものです。マインドフルネスなどの仏教心理学の動きが、既成仏教のなかにも広がっていることと組み合わせ、人間の苦や弱さに向かい合う運動の未来を占う時がきています。

檜尾直樹編『文化と霊性』（慶應義塾大学出版会、二〇二二年）は、慶応大学で行った連続講演をベースに、ヒューマニズムをはらんだスピリチュアリティのさまざまな実践について講演者がそれぞれ一章を書き起こしたものです。伊藤雅之がヨーガの広がり、私が現代における瞑想文化

の大切さについて書いています。

カーツとケッチャムによる『不完全を受け入れる霊性』*Spirituality of Imperfection* (Banam, 1993; 邦訳なし)は、完全になれば他に愛されると思いこんでもがく人間の悲しさをみつめ、人間の不完全さをどう許容するかが物語として諸宗教において説かれてきたと語ります。このような発想は、自己覚知と自己受容によってアルコール依存から回復しようという「十二のステップ」プログラムに刺激されたものです（*Alcoholics Anonymous* という米国初の断酒自助会が生み出したもの。『アルコールリクス・アノニマス』[NPO法人A A日本ゼネラルサービス訳・刊行]で、成立の物語と具体例に則した解説が読めます）。この十二ステップの説く自己覚知と自己受容は、仏教の瞑想による自己認識や、仏法僧に帰依することを通じた自己受容とよく似ていて、英語圏では「十二のステップと仏教」というテーマの書物がいくつも出ています（まだ邦訳はありませんが、たとえば [Therese Jacobs-Stewart, *Mindfulness and the 12 Steps*, Hazelden, 2010.]。完全な人間を神が好むのではなく人間の弱さこそ神が愛でられるもの、そのことを恥じることこそ恥ずかしいのかもしれない。人間に焦点を当てて、人間と

してこの世の努力をする、そうした姿勢が、仏教心理学には秘められていると感じます。

交流が、仏教心理学の可能性をひらく

心理学と呼ぶには、ずいぶん幅広い「運動」だ、とお感じになったことでしょう。人間とその幸福について深く省察する諸学問（心理学のみならず、哲学や医学や看護学や社会福祉学が当然入ってきます）の担い手たちが、仏教の考え方に刺激され、仏教の言葉を活かして、さまざまな共働をする、仏教にもその成果が還元される、そうした全体が仏教心理学という「運動」です。そのために、日本仏教心理学会という、学びと交流の場があります。仏教心理学の学会としては、じつは世界で最初のものです。詳細は、日本仏教心理学会のウェブサイト(<http://bukkyoshinri.sharepoint.com/Pages/default.aspx>)をご覧ください。

仏教心理学という「運動」は、（宗派の差を超え、仏教徒か否かという立場も超えて）仏教という資産を現代人が共有することにもつながっていくと、私は楽しみにしています。

葛西賢太（かさい・けんた）

宗教情報センター研究員。東京大学大学院人文社会系研究科博士課程（基礎文化専攻・宗教学宗教史学）修了、博士（文学）。博士學位論文では、アルコール依存症の断酒自助会 Alcoholics Anonymous がどのような思想的・宗教的背景から生みだされ、宗教性を昇華したかを探究した。

学術振興会特別研究員、上越教育大学学校教育学部助手を経て、現職。心理学と宗教との相互交渉に関心をもち、とりわけ比較瞑想研究、仏教と心理学との出会い、依存症と宗教との関わりが研究テーマ。仏教学ではなく、諸宗教を横並びにみる宗教学の視点から、仏教心理学の可能性を模索している。

編著書に、『ケアとしての宗教』（明石書店、二〇一三年、板井正斉との共編）、『仏教心理学キーワード事典』（春秋社、二〇一二年、井上ウィマラ、加藤博己との共編）、『現代瞑想論』（春秋社、二〇一〇年、単著）、『断酒がつくり出す共同性』（世界思想社、二〇〇七年、単著）、『宗教学キーワード』（有斐閣、二〇〇六年、島園進、福岡信吉、藤原聖子との共編など。宗教情報センターでは、人の姿を描き、宗教報道を継続的に追う同ウェブサイトの編集人でもある。

15分でわかる仏教心理学・ブックガイド

出版社	ISBN (978)	書名	著者名	本体 価格	刊行
大蔵出版	4804305424	出家とはなにか	佐々木閑	3,800	1999
春秋社	4393112021	大乘仏教興起時代 インドの僧院生活	グレゴリー ショベン／小谷信千代訳	3,500	2000*
春秋社	4393106129	お坊さんのための「仏教入門」	正木晃	1,800	2013
春秋社	4393365113	現代瞑想論	葛西賢太	2,800	2010
岩波文庫	4003330210	ブッダの真理のことば 感興のことば	中村元訳	900	1978
岩波文庫	4003332917	ブッダ神々との対話 サンユッタ・ニカーヤ I	中村元訳	900	1986
春秋社	4393360590	仏教心理学キーワード事典	井上ウィマラ・葛西賢太・加藤博己編	3,800	2012
創元社	4422110158	東洋的瞑想の心理学	C.G.ユング／湯浅泰雄・黒木幹夫訳	2,400	1983*
Univ of Hawaii Press	0824831066	<i>Contexts And Dialogue: Yogacara Buddhism And Modern Psychology on the Subliminal Mind</i>	Tao Jiang		2006
春秋社	4393135044	はじめての唯識	多川俊映	1,800	2001
Wisdom Publications	0861715896	<i>Living Yogacara: An Introduction to Consciousness-Only Buddhism</i>	Tagawa Shun'ei, Charles A Muller (『はじめての唯識』の英訳)		2009
佼成出版社	4333025503	現代坐禅講義	藤田一照	2,500	2012
アルファポリス	4434160851	リアルハビネス	シャロン サルツバーグ／有本智津訳	1,600	2011
春秋社	4393364062	呼吸による癒し	ラリー ローゼンバーグ／井上ウィマラ訳	2,600	2001
Guilford Press	1462507506	<i>Mindfulness-Based Cognitive Therapy for Depression</i>	Z.V.Segal, J.M.G.Williams, J.Teasdale		2011
北大路書房	4762825743	マインドフルネス認知療法	Z.V. シーガル他／越川房子訳	3,200	2007
金剛出版	4772409865	弁証法的行動療法実践マニュアル	マーシャ・M・リネハン／小野和哉監訳	4,200	2007
日本評論社	4535983724	新世代の認知行動療法	熊野宏昭	2,200	2012
春秋社	4393323403	脳科学は宗教を解明できるか？	芦名定道・星川啓慈編	3,500	2012
サンガ	4904507865	自分を変える気づきの瞑想法	アルボムッレ・スマナサーラ	1,400	2011
武蔵野大学出版会	4903281155	アメリカ仏教	ケネス・タナカ	2,000	2010

出版社	ISBN (978)	書名	著者名	本体 価格	刊行
工作舎	4875023548	身体化された心	フランシスコ・ヴァレラ他 ／田中靖夫訳	2,800	2001
春秋社	4393133781	仏教瞑想論	蕨輪頤量	2,200	2008
春秋社	4393132845	ゴエンカ氏のヴィパッサ ナー瞑想入門	ウィリアム・ハート／太田 陽太郎訳	2,300	1999
アルマツト； 国際語学 社〔発売〕	4877315931	ミャンマーの瞑想	マハーシ長老／ウウィジャ ナンダー大僧正訳	1,400	2011
HarperOne	0061367397	<i>The Jew in the Lotus</i>	Rodger Kamenetz		2007
岩波文庫	4003318522	意識と本質—精神的東洋 を求めて	井筒俊彦	960	1991
四季社	4884052522	フィーリング・ブッダ	デイビッド ブレイジャー ／藤田一照訳	1,900	2004
秋山書店	4870236103	精神世界のゆくえ	島蘭進	2,400	2007
慶應義塾大 学出版会	4766419702	文化と霊性	樫尾直樹編	2,800	2012
Bantam	0553371321	<i>The Spirituality of Imperfection</i>	Ernest Kurtz・Katherine Ketcham		1993
NPO法人 AA 日本ゼネラ ルサービス	4990228308	アルコールクス・アノ ニマス	Alcoholics Anonymous World Services／NPO法人 AA日本 ゼネラルサービス訳	3,500	2002
Hazelden	1592858200	<i>Mindfulness and the 12 Steps</i>	Thérèse Jacobs-Stewart		2010

*は、品切の可能性がります。

ブックツーリズムを通じて図書館を核としたまちづくりを考える

内野安彦

ブックツーリズムの台頭

イギリスのロンドンから200kmほど離れたウェールズ地方に人口15000人程のヘイ・オン・ワイという町がある。30軒ほどの、それぞれに特色あるコレクションを揃えた古書店が集客の目玉となつて、ブックツーリズムという新たな発想の地域振興の世界的モデルとなつた。その「本の町」としての成功は、広くヨーロッパ各国にも伝播し、日本においても、長野県伊那市の高遠にて試行的に取り組まれてもいる。また、「本の街」としては、不忍ブックストリート（東京・不忍通り）、西荻ブックマーク（東京・西荻窪）、ブックオカ（福岡）な

ど、日本国内のあちこちで萌芽がみられる。両者の違いは、前者が宿泊も見込んだ滞在型の地域振興の、しかも地方の取り組みである一方、後者はそこまでのスケールを求めない、まちなかの街路の賑わいづくりといった点にあるが、共通しているのは共に「本」によって、その「町」や「街」に人を惹きつけようとするものである。

筆者は、2007年から2012年まで、長野県塩尻市立図書館で館長を務めていたことから、高遠でのブックフェスティバルには関心を持っていた。期間中はもとより、期間以外にも数回、フェスティバルの中心となつた「本の家」を数回訪れている。何よりも、筆者自身が大の好きであり、「まちおこし」「まちづくり」という言葉に、図書館員以前に行政マンとしても無関心で

はいられないこともあった。

「ツーリズム」という言葉は、行政が使う場合は、観光というイメージが強い。ほかにもグリーン・ツーリズム（アグリ・ツーリズム）、エコ・ツーリズム等といったものもある。宿泊型の観光地と言えば、温泉、景勝地、歴史遺産、自然を活かしたスポーツ施設等を有することが条件で、「勝ち組」の地位はよほどのことがなければ揺るがない。その一方で、スパリゾートハワイアンズ（旧常磐ハワイアンセンター）、東京ディズニーランド、ハウステンボス等、巨大資本を投下した人工施設に、人々は余暇の安息を求めるようになり、一時はバブル経済の象徴のごとく、全国に多くのアミューズメント施設が誕生した。しかし、経済の落ち込み、ライフスタイルの変化等により、その勢いは長くは続かず、全国的に事業の成否が問われる結果となった。

このような流れを経て、1992年度に農林水産省より「グリーン・ツーリズム」という言葉が提唱され、新たな観光施策として注目され始めたのがツーリズムである。これは、官製の地域振興策で、グリーン・ツーリズムなら、農村地域において、自然や文化、人々との交

流を楽しむ滞在型の余暇活動であり、必ずしも宿泊に限定されるものではない。

この「グリーン（農村）」が「本」に変わったのがブックツーリズムであるが、そもそも、神田の古書店街とは誕生の仕方が根本的に違う。先のバブル経済期との差異は、大きな資本が動くことはなく、開発に伴う自然環境への問題も発生しないことである。「ある」ものに手を加え、かたちを変えるのではなく、「ある」ものに手を加えずに発想という付加価値を付けただけである。そして、何よりも最大の特徴は、今までマイナス要因であった「地方」を逆にプラスの材料として売りにすることにある。先述した観光資源がなくても、参戦できるフィールドが見つかったのである。逆に、首都圏・都市圏から離れた地方であることがアドバンテージを得たと言えなくもない。

筆者は、役所で広報や企画の仕事をした経験もあり、十分に承知しているが、とにかく行政はイベントが好きである。好きと言うのは語弊があるかもしれないが、あえて好きと表現したのは、意味もなくやることがあるから「好き」と揶揄したわけである。

イベントの目的は地域コミュニティの振興を目的にしたものもあるが、多くは地域経済の振興である。イベントとは、少しでも地元にお金が落ちることを意図した取り組みであり、どれだけ多くの参加者を得たかが評価の基準となる。しかし、1日や2日のイベントとは言え、行政が仕掛ける大規模な事業となれば、その準備にかかる経費は膨大である。

しかし、雨後の筍のようなイベントが全国で行われ、〇〇市(町村)という冠がなければ、どこでやっても同じような企画が少なくない。イベントをやるのが目的となつて、本来の目的である地域経済の振興や、コミュニティづくりというコンセプトが見えないものもある。

こうしたイベントの間隙を縫うように生まれたのが「本」を活かしたまちづくりの発想である。単なるイベントではない。しかも、「まちづくり」はこれまで行政の専売特許のようなものであったが、行政をメインに据えずに取り組もうとする動きである。正確に言えば、一度は行政にアプローチしたものの、行政が関心を示さなかった。要は、有志からパートナーとしての適性に欠けると判断されたことによるのかもしれない。

さて、前置きが長くなったが、拙稿は、昨今のブックツーリズムから、図書館と書店の望ましい関係を考えてみる小論である。ブックツーリズムは、単に「本」の売り買いと観光を絡めただけの商行為の興隆を目的としたものではない。「本」はまちおこしの単なる商品ではない。本を尊び、出版文化を考える何かしらの思想が漂うまちに魅力を感じて人が集まるのである。書店が軒を連ねて数十店並んだからといって、同じような種類の本が並んだだけで本を扱う店主や従業員から本の匂いが感じられなければ、一過性の話題づくりで収束しかねない。もちろん、街を行き交う人の匂いも同じである。

本の町プロジェクトの取り組み

ヘイ・オン・ワイをモデルに、日本に本の町をつくろうと活動している団体がある。それは「本の町プロジェクト」である。活動の拠点となる好適地を長野県伊那市に定め、2007年春に市内に「本の家」という名のブックカフェを開店した。翌年、店舗を旧高遠町の市街地に移設し、2009年には、100人近いスタッフ

で構成する実行委員会が主催となり、県の元気づくり支援金の補助を受け、高遠ブックフェスティバルを開催した。第1回目は8月下旬の2日間、2010年の第2回は9月中旬の6日間開催された。

日本初の地方での大掛かりなブックフェスティバルとあって、全国からの集客を得て成功したかに思えたが、イベントだけに特化してはならないと、ヘイ・オン・ワイのように日常的に本好きが集まるまちを目指し、2011年の3回目は「週末・本の町」と企画を変更して、9月と10月の2カ月間を会期に、さまざまなイベントを行った。^①

地元とは関係のない突然まちに現れた有志と、その試みに賛同した市民、さらに行政のサポートと、三者の連携による日本初の「本の町」の萌芽と期待したが、「本の町プロジェクト」による実践は、3回目のイベントをもって幕を閉じた。市民団体、行政の双方において、一定の課題を洗い出すことができ、一旦の終焉となった。

この3年間の取り組みがベースとなって、ブックフェスティバルは2012年に第4回目を迎えたが、ランドマークであった「本の家」は既に閉店となってしまう、

規模も縮小せざるをえなくなり、チラシに書かれた「今年から住民の手で開催します」とのコピーが、この取り組みの難しさを表しているようにも感じられた。

ヘイ・オン・ワイを日本につくろうという壮大なプロジェクトであったが、あくまで試行であることから、その成否を短絡的に論ずるつもりはない。試みとしては十分に評価されるべきで、前例のないイベントに対して役所は消極的という一般的な概念があるなか、図書館を始め、イベントをサポートしようという体制がつくれたことは、伊那市の姿勢に拍手を送るものであるし、大きな試金石となったことは否めない事実である。

しかし、この試みを知り、見続けたなか、私がずっと疑問を覚えていたのは、なぜ、図書館をサポートではなくパートナーとしなかったのかということである。

ヘイ・オン・ワイという町の特異性

ヘイ・オン・ワイは、ナショナルパークにあり、本だけではなくアンティークショップ、レストラン、民宿も多数点在する。まちのランドマークとなる古城もあり、

写真や映像で見る限り、仮に書店がなくても訪ねてみたいと思う、いかにもイギリスの郊外のまちといった趣である。これは、ヘイ・オン・ワイに限らず、歴史遺産が日常生活のなかに佇むヨーロッパ各国に共通するものである。筆者もこれまで数回ヨーロッパを訪ね、その度に感じるのは、付け焼刃ではつくりえない「時代の産物」がヨーロッパの魅力だということである。

仮に、ヘイ・オン・ワイを訪ねる時、書籍の購入を目的に行くかと聞かれたら、筆者はNOと答える。書籍の購入に高額な旅費を捻出するつもりはないし、図書の購入だけを目的に数日間も日本を離れることに価値も見いだせない。要は、ヘイ・オン・ワイというまちの空気を吸うことが目的で、ついでに本を見ることがなると思う。高価な稀観本の蒐集なら別かもしれないが、それでも旅費は相当な負担である。多くの訪問者は、本を買うのではなく、本のある町を歩きたいだけなのである。日本国内でもそうである。神田は本を買う楽しみもあるが、本好きには、その街の空気がおいしいのである。

こうして考えると、ブックツーリズムは、単に「本」を売りに滞在型の入込客を得るには、それなりの観光資

源に恵まれた土地でなければ成立するのは難しいのではないか、というのが私の考えである。ツーリズムとなれば、滞在時間の長い、できれば宿泊を伴う大きな経済効果を期待するものであり、たかだか「本」だけで、そこまでの誘客は困難であろう。伊那市の高遠は、桜でその名を全国に知られる観光地ではあるが、四季を通じて観光客で賑わうまちではない。歴史を感じさせる住居も多くの点在し、「本の町」のイメージとしてのアドバンテージは高いが、ツーリズムにまで繋げるには、多くの課題を感じざるをえない。むしろ、「本の町」と一気にジャンプせずに、ブックストリートとして「本」を主役に据えるのであれば、アイデア次第で、それなりの勝機はあると思える。

高遠ブックフェスティバルを訪ねて感じたのは、行政の姿が希薄だったことである。「まち」を挙げてのイベントとは思えなかった。イベント関係者と行政の詳しいやり取りはわからないが、「ストリート」ではなく「まちづくり」を謳うのであれば、行政は欠くことのできないパートナーである。昨今、新たなまちづくりの起爆剤として衆目を集めるB級グルメにしても、行政が乗り

出さなければ、ここまで、全国を席捲するブームとはならなかったはずである。

市民から見れば、行政をパートナーにすることの煩雑さは否めないが、共通の認識に立てれば、これほどの強力な後ろ盾はない。また、地方自治体には、基本構想、基本計画といった一定の将来像を描いた計画がある。いわばマニフェストである。この計画に記述のないものを突然持ち出し、しかも「本の町」としてPRするのは、関与していない市民にとっては寝耳に水。「ストリート」ならばいざ知らず、「町」を名乗る以上、時間を要するにしても、一定のプロセスを踏むべきであると思う。特に、地方になればなるほど、議会や区長等の理解を得ずに行うことは好ましいやり方とは言えない。

「本の町」ヘイ・オン・ワイは、リチャード・ブースという稀代の唯我独尊タイプのリダーが強引に進めたまちづくりである。国を相手に真面目に独立宣言をするほどであるから、その精神までも真似ることは困難である。しかも、日本との地方自治制度の違いも大きな問題で、イギリスには地域自治組織であるパリッシュ、あるいはコミュニティといった自治体ではない準自治体があ

り、ヘイ・オン・ワイもこれに該当する。実際に、ヘイ・オン・ワイの首長や議員はボランティアで、「町」といっても自治会のような位置づけで、古書店街は15分程度で歩けるエリアに集約されている小さなコミュニティである。

日本人の読書傾向からみる本の町の可能性

このようなことから、ヘイ・オン・ワイを一つの理想郷としつつ、もっと日本的発想で本の町を考えてみてはどうだろうか。

まず「町」の概念であるが、日本の現在の地方自治体の規模から考えて、「町」を同一の色で染めるのは無理である。平成の大合併以降、地方自治体は1700余になった。極端に言えば、岐阜県の高山市の行政面積は2177km²。香川県(1876km²)よりも広いのである。山や川のような市域全域にその姿を隠すことなく見せるものならばわからなくてもいいが、僅か数十軒の書店が軒を並べる「街」を「町」と表現するのはそぐわないだろう。あくまでイメージの問題であり、些末なことと一笑

に付す人もいようが、やはり、ストリートと称した方が適当であると思う。

筆者は14年間の公共図書館勤務で確信したことがある。それは、児童書や郷土資料を除く一般書に限った場合であるが、読者は、活字の好きな読者と、本の好きな読者の2タイプに大別できることである。前者は、1回の来館で借りていかれる冊数も多く、主に読まれるのは新刊書である。一方、後者は、1回の利用冊数は少なく、利用されるのは刊行後数年経ち、書店の店頭から消えたような本が多い。

また、前者は、新刊書やベストセラー本のリクエストをされる人が多く、後者は、相互貸借(自館にない資料を他市町村から借り受ける制度)を利用される傾向が高い。あくまで、主観的な見方で、裏付けに足る客観的なデータはないが、活字が読書の全てであるという読者と、装丁も含め見て触って本を楽しむ読者がいるということである。多分、前者は、古書店に行くことはほとんどなく、後者は、古書店も見えて歩くタイプかと推測される。

こう考えると、一概に本とは言っても、活字を追うこととにのみ関心のある読者は、「本の町」にあまり興味を

示さず、いわゆる本そのものを愛でる読者でなければ、場所によっては相当な時間的、経済的な負担を払ってまで、訪ねることはないと思える。また、先述するように、いくら本好きとはいえ、観光も兼ねた飲食等の楽しみや、本以外の買い物も楽しめなければ、個人はどうあれ、家族という単位を集客するのは極めて困難である。本来のターゲットである「本」を主軸に売りに出すのであれば、その市場は極めて小さく、それだけで町の経済を潤すことなどはできない。しかも、日本語で書かれた本を求めに、海を渡ってまで来る蒐集家は一部の好事家であり、一般人に至っては、美術書等、日本語の知識がなくても読める(見られる)本を除けば、ヘイ・オン・ワイのような英語圏の優位性には遠く及ばない。

そうなれば、少なくとも世界という市場は別にして、国内に絞ったにしても、多様な集客を図れる本以外の魅力的なものがなければ、本の町構想には、かなり高いハードルが待ち構えている。一方、ヘイ・オン・ワイはこのようなものが揃っていることで成り立っている「本の町」である。

「本の町」と「生涯読書」の関係

各務原市が2011年4月から「本の街 かかみがはら」を始めた。この事業は、市のプロジェクト46事業の一つとして位置づけられたもので、開館20年目を迎える市立図書館の改修、幼児・児童向けの図書を集めた「もりの本やさん」の増築、大規模な古本市の開催等に、既存事業を含めた3億円規模の事業として広くPRされた。

「本の町」とは違うが、「生涯読書」を施策に謳う自治体も少なくない。極めて聞こえのいい言葉で、為政者が好みそうなものである。しかし、この二つは別なものではない。「本の町」と「生涯読書」は一体のもので、前者が経済の活性化であれば、後者は人づくり、コミュニティづくりである。先述したように、この二つが揃うことで、初めて「まちづくり」という名のイベントが成立するのである。

市内の古書店を訪ねて多くの人が市外から訪れるものの、公共図書館も学校図書館も貧弱で、市民の読書意欲

の乏しい町を「本の町」とは決して言えないだろう。

では、どうすればよいのか。まず、一点目は、インフラの整備である。「本の町」を標榜するなら、他市町村の公共図書館員、学校図書館員が羨ましがくるくらいの資料費、職員体制の充実、施設の整備等が前提である。

2点目は、行政と市内の新书書店、古書店業者との綿密な連携である。本の町のパートナーに市内の書店が関わらなければ画餅に終わる。

3点目は、理事者の鶴の一声ではなく、行政ならば、企画サイドではなく、図書館がメガホンをとって、庁内及び市民への呼びかけを行うことである。

4点目は、本は読者、書店だけで成り立つものではない。作り手である著者、出版社、取次といった業界関係者が注目するものでなければならぬ。要は、出版界を巻き込むコミュニティづくりが必要である。

そして、最後に大切なことは、段階を踏むことである。まずは「街」から始めるべきで、この「街」が市民に認知され、市民が誇りを持って初めて「町」と名乗るべきである。なぜならば、「町」を名乗る権限を持つのは市民にはかならないからである。「町」とは、一つの性格

を勝ち得た宣言のようなものであり、名乗るのは行政ではない。

また、短兵急に成果を求めることも、却って拙速な取り組みになる危険がある。もともと、ヘイ・オン・ワイにしても、一朝一夕に出来上がったものではない。しかも、生みの親であり、「本の王」を自称するリチャード・ブースの類まれなパフォーマンスが、パブリシティ効果となつて、かなりの付加価値を装飾することで、本の町としての地位を築いたのである。

図書館を核にした本のまちづくりの提案

高遠における有志による「本の町」の試行的な取り組みは、少なくともヘイ・オン・ワイというイギリスの田舎町の存在を広く知らしめたことと、ブックツーリズムという地方への福音を与えてくれたことが大きな成果である。この成果を継承し、発展させていくには、役所が積極的に加わり、なかでも図書館がその中心を担う必要があると思う。

具体的には、図書館の閉架書架の本を活かすことで、

図書館(資料)の新たな魅力をPRすることは考えられないだろうか。一般の図書館利用者は、図書館に閉架書架というものがあることをご存じだろうか。分館のような狭小な図書館では閉架書架を持たないところが多いが、中央館的な役割を担う図書館には、情報の新鮮さが劣化したもの、利用頻度の低下したもの、汚損・破損等が生じたものを保管する閉架書架を設けているのが一般的である。

図書館は新館オープン時にかなり余裕をもつてつくつても、開館して5年も経つと書架は本(資料)で一杯になり、先に述べた理由よりも、物理的な理由で閉架書架に「居場所」を移される本が出てくる。なかには、配架してあっても、もともと利用の少ない全集ものや専門書は、美品の状態で閉架書架に保管されていることが多い。卑近な例だが、鹿嶋市の図書館では『群書類従』が、塩尻の図書館では筑摩書房の大量の『ちくま学芸文庫』が閉架書架にあり、閉架書架に初めて入った時に、開架以上に魅力的な「もう一つの図書館」が図書館にあることを筆者は知った。この「もう一つの図書館」を市民は知らないのである。書店で例えれば、開架は新刊書店、閉架

は古書店といったものである。

この閉架書架の本を「本の街」の核として位置づけ、多くの人にその存在と閲覧・利用を促し、その周りを、販売を目的とした新刊書店や古書店が固めることで、相乗効果を狙うべきと考える。

現実的には、自治体の条例・規則で「図書館」の設置場所は決められているが、「本の街」を政策的に進めようとすれば、いくらでも例規の解釈はできる。大きな自治体の図書館ともなれば、閉架書架の蔵書は数十万冊を有し、通常の図書館利用者以外の「本好き」の新たな利用の開拓に繋がるのが十分に考えられるし、何よりも市民の財産を周知・公開することは自治体の責務にはかならない。

閉架書架の資料であっても、図書館の蔵書検索で探すことは可能であるが、書名のはっきりしているものならば検索も容易だが、大半の読者はそうはいかない。活字を追うことだけではなく、本の背表紙を一瞥し、実際に本を手に取り、頁をめくり、その手触りを楽しむのも「読書」である。

老若男女の本好きが集まり、書店や読者間の交流があ

り、そして地域の経済が潤う、そんな「本の街」を生み、育てるには、ヘイ・オン・ワイを目指すのは良いが、熟成には時間が必要である。まちの賑わいは、そのまちの市民が入込客を笑顔で迎えるか否かである。そのためには、「本の街」の意義を十分に市民が理解し、出版文化というものが漂うまちを創造することが必要である。

これまでもそうであったが、「本の街」を即席のまちづくりにはしてほしくない。全国で取り組まれているブックストリートの発想に行政がパートナーとして参加することで、「本」だけではない、「人づくり」という側面が生まれてくる。

ブックツーリズムは結構なことである。しかし、本を活かしたイベントを仕掛ける際は、その本を書いた、つくった人の思いを付度し、取り組んでほしいというものである。学ぶべきは、いきなりヘイ・オン・ワイではなく、高遠で取り組んだ市民の矜持である。

ヘイ・オン・ワイを聖地と標榜するも、「古い町並みに住んでいるのはなんと外国人やロンドンからきた人たちばかり、地元の店は外からの波に押されるようにして消えてゆくという現実も見えてくる。」とのレポートも

ある。本末転倒ではなからうか。

矜持を持った「本の町」づくりを

「図書館員の倫理綱領」というものがある。図書館関係者ならば誰もが知っていると願いたいだが、現実はそのではないようである。これは、1980年に社団法人日本図書館協会が総会決議した12カ条からなる、いわば図書館員の矜持である。この第12に「図書館員は、読者の立場に立って出版文化の発展に寄与するようつとめる。」と、謳っている。しかし、公共図書館の実態は、貸出冊数を伸ばすことを目標に掲げ、なかにはベストセラー本を複本として大量に揃え、書店の店頭に平積みされている旬のコミックスをもコレクションにし、その一方で専門書を買収するところがある。この実態を作家や出版業界から「無料貸本屋」と批判されて十数年が経過するが、大きな変化は見られない。

私は、2012年7月に行われた第20回東京国際ブックフェアの「本の学校 出版産業シンポジウム in 東京」の分科会のパネラーに招かれ、その席上、社団法人全国

出版協会・出版科学研究所の『出版指標・年報』を例に挙げて、図書館に置かれるべき本著が、大半の図書館で所蔵されていない実態を報告し、先の倫理綱領と絡めて、図書館は出版文化を本気で守ろうとしているのかを説き、多様な出版物のシヨールームとなるべき図書館が、書店と同じ品揃えをしている現状に警鐘を鳴らした。

塩尻では、鳥取県米子市を拠点とする今井書店が1995年に始めた「本の学校」の精神を受け継ぎ、「信州しおじり 本の寺子屋」なる事業を2012年度から展開している。

きっかけは、塩尻市の近くに住む、河出書房新社で『文藝』の編集長をしていた方が、塩尻の図書館を訪ねてきたことに始まる。「図書館が持つ膨大なコレクションを活かして、地方から出版文化を考える仕組みづくりをしよう」との提案に意気投合し、始めたものである。この取り組みには、辻井喬、永井伸和(NPO法人本の学校理事長、今井書店会長)、熊沢敏之(筑摩書房代表取締役社長)、常世田良(前日本図書館協理事)と、作家、書店、出版社、図書館の各界の識者が顧問に名を連ねてくれた。

もともと、塩尻市は筑摩書房の創業者である古田晃の

生誕の地として、これまでも出版文化を考えるイベントに取り組んできた素地があったので、それを拡大して、地方から発信してゆこうと、理事者・議会の了解も得られたプロジェクト事業である。

最後に、話がブックツーリズムからずれたが、「本の町」を付け焼刃な取り組みとせず、商業主義に左右されず良書がきちんと出版され、それを購入する一定の市場が構築され、そして図書館が保存の中心となり後世に「知の財産」を繋ぐ社会をつくることが喫緊の課題である。この議論を埒外に、「本の町」が一過性の話題づくりに終わらないことを願うものである。

《参考文献》

- (1) 齊木博司「本の町プロジェクト―ブックツーリズムという手法とその普及」『地方自治職員研修』第45巻通巻630号、2012年、170～177頁。
- (2) 鈴木輝隆「ブックタウンによる地域経営」『神田神保町とエイ・オン・ワイ』大内田鶴子・熊田俊郎・小山騰・藤田弘夫編、東信堂、2008年、75頁。
- (3) 山田光矢『バリッシュ』北樹出版、2004年、15頁。
- (4) 前掲(2)、83頁。
- (5) 齊木博司「日本にも「本の町」を作りたい」『新世紀書

店』北尾トロ・高野麻結子編、ポット出版、2006年、166頁。

- (6) 「各務原 本の街計画」『朝日新聞』岐阜朝刊、2011年1月7日付、23頁。

- (7) Paul Collins, *SPENCE HOUSE*, Bloomsbury, 2003. 中尾真理(訳)『古書の聖地』晶文社、2005、355頁。

内野安彦(うちの・やすひこ)

1956年生まれ。松本大学松商短期大学部、常磐大学非常勤講師。筑波大学大学院図書館情報メディア研究科博士後期課程中退。茨城県鹿嶋市役所、長野県塩尻市役所の図書館長を経て、現職。著書に『だから図書館めぐりはやめられない』(ほおずき書籍、2012年)、『図書館はラビリンス』(樹村房、2012年)、『図書館長論』(仮題)近日刊行予定(樹村房、2013年)。論文に「知恵の交流を通じた人づくりの場として——長野県塩尻市立図書館の新たな取り組み」『日本生涯教育学会年報』第32号、2011年、ほか。

変化の中にある出版流通

はじめに

出版物の売上減少が止まらない。日本における書籍の売上は、1996年をピークに、以後前年割れの状態が毎年のように続いている。流通の現場での必死の努力にもかかわらず、状況を好転させるにはいたっていない。

一方で、再販制とそれにもとづく委託販売システムの制度疲労を指摘する声もある。返品可能な委託制度の中で、変わらない定価、変わらないマージン率が設定されているため、価格を軸とするシステムが機能せず需給調整に失敗している現実をあらわしているのが、適切でない仕入による高い返品率ではないかという指摘である。

これに対して、出版社も手をこまねいていたわけではなく、書店のマージンを高くするかわりに、返品に対し

ては書店の負担を通常より多くするという「責任販売」を実験的におこなう等しているが、まだ道半ばといった感が強い。

そうした流れの中で、大手販売会社からもここ数年委託制度見直しの動きが出てきている。主流は、返品率を下げることに重点を置き、販売会社と書店の間に新しい契約が結ばれつつあることであろう。この新しい契約が書店の仕入・販売、出版社、並びに読者の方々へのどのような影響を及ぼすことになるのか、われわれ本にかかわる者として興味を持たざるを得ない。

そこで、今回の小特集では、販売会社にその目指すところについて、とりわけこの動きの中における「専門書」の位置づけを明らかにしてもらうこととした。今後、これを受けたかたちで書店や出版社などの声も聞ければと願っている（人文会広報委員会）。

倉根智男(株式会社トーハン 前仕入企画部シニアマネジャー兼仕入企画部マネジャー(専門書担当))

2013年年頭に発表された出版科学研究所のデータによると、2012年の出版物販売額は1兆7398億円。前年に比べマイナス644億円(3.6%減)。これにより出版物販売額は8年連続前年割れ、特に雑誌だけみると15年連続前年割れとのことでした。

市場が継続的にシュリンクし、販売チャネルが多様化するなか、業界3者(書店・取次・出版社)がそれぞれの立場でよりベストな対応をしていかなければ出版業界自体が埋没しかねない厳しい時代が続きます。今回は貴重な紙面をお借りし、トーハンが出版社様、書店様とともに「売る」ために取り組んでいることを3つのキーワードにまとめてご説明したいと思います。

「足元の売上を伸ばす」

一昨年(2011年)に書店支援システム「TONETS V」、そして昨年(2012年)、出版社様向システム「TONETS i」を開発・稼働させました。これらにより「書店様」「出版社様」「トーハン」がリアルタイムに単品の情報や課題が共有できるSCM(出版サプライチェーンマネジメント)が整いました。「V」と「i」を活用することで市場を「可視化」し、より効率的かつ効果的な販売方法を業界3者で追求できる体制が構築できたといえます。

トーハンはここで得られる情報を徹底的に駆使し、書店様、出版社様に積極的に施策提案させていただくこと

で、書店様の足元の売上を伸ばしていきます。

特に「i」では単品・個店単位での販売情報、在庫情報、受注状況、今後の販売傾向等をリアルに把握することが可能です。さらに雑誌を含めた他社の類書の販売傾向や販売量も閲覧できますので、出版社様の生産計画や販売計画に大いに役立つと考えております。

その他、様々な機能を盛り込んでおりますが、それぞれを単なる機能としてだけではなく、書店様、出版社様、そしてトーハンとのコミュニケーションツールとして活用することが最大の目的です。まだ未加盟の出版社様におかれましては、この機会にぜひご検討いただければと思います。

「新しい売上を創出する」

書店店頭に求める読者ニーズが多様化するなか、従来の複合商材に加え様々な新商材の提案は今まで以上に強化していきます。

一方、年々関心が高まる「電子媒体」への対応も昨年12月、「c i s h e e f」(シーシェルフ)を開発、スタートさ

せております。

これは新たな投資が少ないこと、そして何より電子書籍を書店店頭で販売できるビジネスモデルであり、発表後は帳合の垣根を超えて多くの書店様から反響がありました。

今後 c i s h e e f をさらに拡大させ、店頭にお客様の足をはこばせるには、コンテンツの拡充が不可欠です。専門書の中でも特に人文書は電子書籍のコンテンツとしても大変魅力のあるものだと考えております。電子コンテンツ化の推進、電子コンテンツの提供にぜひ引き続きご協力をお願いいたします。

「需要のあるところへ積極的に働きかける」

昨年10月に外商販売促進に特化した組織を新設いたしました。

外商強化を最大の目的としており、専門書出版社様にもぜひご活用いただきたい部隊です。昨今「大物企画」は減少していますが、この部隊は従来の「大物」という概念にこだわらず、書店様に売り歩いていただく商品を

発見、需要のあるところに働きかけていただくよう書店様に仕掛けていきます。全集や地域性の強い商品など人文書出版社様のなかでも多くの企画があると思います。情報を早期にご提供いただき、ぜひ弊社の販売部隊と一緒に潜在需要の開拓をしていければと考えております。

「専門書販売 特に人文書販売について」

専門書と一口にいつてもジャンルは多岐にわたり、店頭の動きも一律ではありません。例えば、医書・看護書・コンピュータ書・経済経営書などは日進月歩で進化する科学技術や変化する社会情勢に即した「新刊」が売上の中心となります。

それに対して人文書は「基本図書」と呼ばれる「ロングセラー」が売上の基盤です。

弊社のデータですが、人文書売上ベストの「100」でも「200」でも、新刊の占める割合は10%前後に過ぎません。残りの90%は「既刊」が占めています。文庫などと異なり新刊依存度が低いジャンルであり、いかに品揃えに対する知識や経験が必要かがわかります。

前述した「TONETS V」には欠本チェック機能が搭載されており、店頭でも多用されています。ジャンル毎にチェックすべき銘柄があるわけですが、人文書の銘柄リストの精度を上げていきます。売行良好書銘柄だけを欠本補充リストとするのでは無く、リコメンド性の高い「生きた」欠本補充システムにするよう日々精度を上げていきます。

人文書は新刊依存度が低いという販売特性がある一方、新刊点数が多いという特徴もあります。弊社のデータを集計すると月平均220点前後が搬入されており、1年前と比較しても変わりません。

毎日発行される多くの新刊の中から自店の客層・嗜好にあった商品を見極め、既刊書を効果的に組み合わせる棚を作っていくジャンル。そう考えると、人文書の販売は選書能力、いわゆる「目利き」に尽きるのではないのでしょうか。前述したTONETS Vなどデータを利用した「目利き」の有効性も高めていきますが、やはり最後は「人」だと思います。

以前、東北のある書店様の人文書売場に伺った時、非常に訴求力の高い品揃えをされており感動したことがあ

ります。一言で言う、「手のかかった棚」。ただし、単に「POPが充実」とか「陳列が綺麗」というだけではなく、置かれている商品群にストーリー性と深みがあり、さらに次のステップへといざなう教養が感じられ、本を選んでいてワクワクするのです。

こうした棚を作る人材や書店様の環境を業界3者がそれぞれの役割で作り上げていかなければならないとその時痛感しました。

「人材の育成」といえば簡単ですが、一朝一夕には困難です。「研修会」「勉強会」「マニュアル」「情報交換」「専任担当者配置」等々、様々な試みを繰り返していく必要があるでしょう。トーハンもアライアンス法人制度を導入し、多くの書店様と契約しパートナーシップを強めております。その枠組みを通じて、このような情報発信や時には問題提起を行っていきたいと考えております。

何より人文書販売の専門集団である人文会様には様々な取り組みの中心に常に存在し、強い影響力を発揮していただきたい。大いに期待しております。

人文書売場の前でワクワクして本を探す読者が一人でも増えるよう、トーハンも皆さんと一緒に考えて考え、

体を動かして行きたいと考えております。

執筆いただきました倉根智男氏は、2013年4月1日より大阪支店長にご異動になりました。本記事は2月に執筆され、内容はそのまま掲載させていただきました。（人文会広報委員会）

日販が取り組む出版流通改革について

駒村一雄（日本出版販売株式会社 書籍部書籍仕入第二課課長）

日販グループの出版流通改革が目指すゴールは「2015年までに行き過ぎた委託制度を返品に制限のある制度に置き換え、書籍の返品率25%を達成し、得られたプロフィットを分け合うことで出版社様の損益構造改革、書店様のマージンアップを実現」することです。

2012年を振り返りますと、書籍の店頭POS売上増加率はマイナス5・0%、全ジャンルが前年割れという極めて厳しい結果に終わりました。売上の減少基調が続く中、出版流通改革を推進させて頂くことで、業界三者（書店・取次・出版社）の利益の最大化を目指してまいります。以下、具体的な内容をご説明致します。

書店様マージンアップについて

書店様のマージンアップのためのアプローチは2通りです。一つ目が、「委託制度をベースにリスクと利益の再配分をする」ということ。これは、三者間の構造を「返品を少なくすれば利益が増える」という状態にしようとするものです。この構造を具現化する仕掛けが、日販取引書店様とのPARTNERS契約、MPD取引書店様とのBookインセンティブ契約であり、返品率改善で生まれた利益をインセンティブという形で書店様に還元しています。契約書店様数は全体の8割近くとなっています。

もう一つは「買切制度」という視点からのアプローチ

です。計画販売や商品ごとに設定されたインセンティブなど、書店様が意識を持って仕入、売り切る銘柄を増やし、売場の一定比率を占めることを常態化すること、自ずと売上マージン率を高め、書店様の収益改善を進めます。

出版社様との契約は、昨年(2012年)9月末時点で81社まで拡大し、書籍売上シェア45%を超えるところで拡大することができました。前年度では74社、36%でしたので、順調なペースで拡大できております。

具体的には、新たなインセンティブスキームとして、PPI(パートナー・パブリッシャーズ・インセンティブ)をスタートさせています。

これは出版社様からお預かりしたインセンティブを原資として、パートナー書店様のパートナー出版社銘柄の年間売上に対して0・5%から2%のインセンティブを還元していくスキームです。PARTNERS契約で全体のお取引に対してインペナがかかっていることを勘案し、PPIについては返品率35%以下を達成すればインセンティブが発生するかたちとし、ペナルティは設定しておりません(返品率はパートナー出版社別に判定します)。

ご提供しているサービスについて

契約書店様にご提供しているサービスメニューの中から「新刊申込(アドバンスMD)」「リリースフェース(発注代行)」「High-Profit企画」について概略を記述します。

「新刊申込」とは、書店様が仕入数をコントロールして売上率を高めるために、新刊の事前注文を受け付けるもので、コミック全点・書籍およびムックの大型新刊をサービス対象としております。書籍については、発売2ヵ月後に売上率80%以上という目標に対して83%の実績と良好な実績を挙げていただいております。

「リリースフェース(発注代行)」とは、追加発注オペレーションを書店様のニーズに合わせて日販が代行するものです。店頭売上の向上とローコストオペレーションの両立を実現していただくためのツールとしてご提供しています。このサービスを導入していただいた書店様では、売上上位銘柄の店頭充足率が平均5ポイント向上しています。ご利用いただいている書店様は、2月末時点で500店舗ほどまでに拡大しており、店舗様のご希

望に応じたメニュー追加も随時実行中です。基本在庫の欠本補充の他に、文庫、児童書といったジャンルの出版社様商品リストを参照した補充オペレーション代行を取り揃え、ご利用書店様の店頭充足率向上をサポートさせていただきます。

最後に、単品・シリーズ銘柄で非常に高い販売マージンを設定する「High-Profit企画」をご紹介します。送品冊数もしくは売上冊数に対してインセンティブが発生し、売り切って頂くことで書店様のマージンが最大35%を超える商品群です。前年度からスタートしまして、100企画をリリース致しました。成果を検証しながらさらなる拡大を図ってまいります。

人文書販売について

以上、日販が考える出版流通改革をご説明しましたが、一般文芸書、実用書、文庫等を中心とした取組となっており、人文書については今後、試行錯誤しながらすすめていく段階です。

人文書はロングテールの銘柄が多いジャンルです。お

客様を惹きつける為には、売れ筋だけでなく、古典・名著の陳列や特徴、特色のある棚づくりが必要となります。「棚を通してお客様と会話する」というような表現がありますが、代表例が人文書ジャンルです。しっかりとした基本を外さない品揃えによってお客様に安心と信用を与えること、テーマやキーワード、キーパーソンによって強弱を付け購買意欲を掻き立てることが重要です。

品揃えの一助にして頂くため、日販も商品情報のご提供や関連書籍を集めた棚提案などMD提案を強化してまいります。また「書物復権」など出版社様がすすめる復刊フェアなどは「High-Profit企画」と好相性と思われまます。是非、人文会加盟の出版社様のお知恵をお借りし、書店様の売上獲得とマージンアップに直結する企画をご提案させていただきたいと考えます。

多品種で専門的である人文書の品揃えにとって、常備の有用性は極めて高いものです。しかし一方で、常備には年度入替による一括大量返品品の側面も存在します。常備の良い点を残しつつ、前述の「リリーフェース」との組み合わせや、2年常備など入替返品を抑制する取組みを今後、考えてまいります。

人文書は品揃えの難しいジャンルであり、ご担当者様のセンス、個性、こだわりが大きく反映されると思います。お客様を魅了する売場づくりのためには、新刊情報やフェアのご提案だけではなく、勉強会など生きた情報共有の場も多く必要でしょう。是非、ノウハウを多く持つてらっしゃる人文会様のご協力を頂きたいと考えます。この場をお借りしてお願い申し上げます。

今後とも日販の取組みについてご理解とご協力の程、よろしくお願い申し上げます。

研修会報告 調査・研修委員会から

「大学図書館の変容——慶應義塾大学メディアセンターの選書・蔵書を中心に」

● 講師：岡本聖氏（慶應義塾大学メディアセンター）

● 開催日：1月16日（水）

● 場所：岩波セミナールーム

人文書出版社にとって大きな取引先であるはずの大学図書館のことについて、私たちは意外と知らないことが多いように思えます。たとえば、集書の方針、蔵書構成、デジタル化の進捗状況、予算構成、組織形態などについて、出版社がどれだけ把握しているでしょうか。この研修会では慶應義塾大学メディアセンターの岡本聖氏をお迎えして、慶應義塾大学における図書館業務とその変化について講演をいただきました。

慶應大学は図書館をメディアセンターと呼ぶのですが、岡本さんは日吉メディアセンターに勤務されていて、予算管理・選書・発注業務や洋雑誌契約・電子資源契約をおこなっています。また学術出版社数社と共同でとりこんでいる電子学術書利用実験プロジェクトのメンバーでもあります。

高等教育現場においては予算削減がつづいており、それにともなう慶應でも組織と人員が縮小化しているようです。肝心の図書購入予算については、書籍（冊子体）の予算が減少し、購入対象がデジタル・アーカイブやデータベースなどの資料に移行しているといえます。1時間にわたる岡本さんの話からは、人文書出版社と大学図書館は学術情報の担い手として隣接していることが再認識される一方で、書籍の電子化に関しては大きな温度差があることが明確になるなど、とても刺激的な講演会でした。

「ソーシャルネットワークを活かした人文書の棚作り——情報収集の技術」

● 講師：空大氏・北川毅氏・幸恵子氏

● 開催日：2月13日（水）

● 場所：岩波セミナールーム

ブログやツイッターなど新たなSNSの発展が広がりを見せる中、書店現場でも、棚作りに伴う情報収集の仕方も変わってきました。

今回は「ソーシャルネットワークを活かした人文書の棚作り——情報収集の技術」というテーマで公開研修会を行いました。講師として書籍編集者の空大氏、リプロ池袋本店の人文書担当者である幸恵子氏、代官山蔦屋書店の人文書のご担当である北川毅氏の御三方にご登壇いただきました。空大氏は全国の書店を訪れたご経験から、人文書棚のユニークな書店についてのお話を織り交ぜながら、書店における人文書についてお話いただきました。また幸氏は現役書店員というお立場から詳細なレジユメを元にカルトグラフィア・企画棚の作り方について技術的なお話をいただきました。そして北川氏はセレクト書店である代官山蔦屋書店においての人文書の位置づけについてお話いただきました。

御三方のお話の後、空大氏の進行で幸氏と北川氏の対談に移りました。幸氏は情報収集に主にSNSを使用しているとお話される一方北川氏は情報発信にSNSを使用しているというお話をされました。満員の会場はSNSの使い方について白熱した議論と質疑応答が取り交わされました。引き続きこのような取り組みを続けて参りたいと思う所存でございます。

報告 橋元博樹（東京大学出版会）

報告 奥村友彦（晶文社）

人文会会員名簿

〒113-0033 文京区本郷5-32-21 みすず書房内

2013年4月現在

社 名	担当者	〒	住 所	電 話	FAX
大 月 書 店	駒谷 光彦	113-0033	文京区本郷2-11-9	3813-4651	3813-4656
御 茶 の 水 書 房	平石 修	113-0033	文京区本郷5-30-20	5684-0751	5684-0753
柏 書 房	衣笠真二郎	113-0021	文京区本駒込1-13-14	3947-8253	3947-8255
紀 伊 國 屋 書 店	三橋 直也	153-8504	目黒区下目黒3-7-10	6910-0519	6420-1354
慶應義塾大学出版会	大野 友寛	108-8346	港区三田2-19-30	3451-3593	3454-7029
勁 草 書 房	小笠原 勝	112-0005	文京区水道2-1-1	3814-6861	3814-6854
春 秋 社	片桐 幹夫	101-0021	千代田区外神田2-18-6	3255-9611	3253-1384
晶 文 社	奥村 友彦	101-0051	千代田区神田神保町1-11	3518-4940	3518-4944
誠 信 書 房	新保 卓夫	112-0012	文京区大塚3-20-6	3946-5666	3945-8880
創 元 社	華園 斉	162-0825	新宿区神楽坂4-3 煉瓦塔ビル	3269-1051	5229-7139
筑 摩 書 房	三澤 宏幸	111-8755	台東区蔵前2-5-3	5687-2680	5687-2685
東京大学出版会	橋元 博樹	113-8654	文京区本郷7-3-1	3811-8814	3812-6958
日 本 評 論 社	朝倉 哲哉	170-8474	豊島区南大塚3-12-4	3987-8621	3987-8590
白 水 社	岩野 忠昭	101-0052	千代田区神田小川町3-24	3291-7811	3291-8448
平 凡 社	根井 浩一	101-0051	千代田区神田神保町3-29	3230-6572	3230-6587
法政大学出版局	古川 真	102-0073	千代田区九段北4-3-24	5214-5540	5214-5542
み す ず 書 房	田崎 洋幸	113-0033	文京区本郷5-32-21	3814-0131	3818-6435
ミネルヴァ書房	三上 直樹	101-0052	千代田区神田小川町2-4-17 大宮第一ビル6F	3296-1615	3296-1620
未 來 社	水谷 幹夫	112-0002	文京区小石川3-7-2	3814-5521	3814-8600
吉 川 弘 文 館	片山 伸治	113-0033	文京区本郷7-2-8	3813-9151	3812-3544

会長 菊池明郎(筑摩書房)

代表幹事 田崎洋幸

会計幹事 平石 修

書記幹事 新保卓夫

(◎委員長(幹事) ○副委員長)

販売・企画委員会 ◎朝倉哲哉 ○華園 斉・三上直樹・三橋直也・片桐幹夫・衣笠 真二郎

調査・研修委員会 ◎橋元博樹 ○古川 真・駒谷光彦・三澤宏幸・片山伸治・小笠原 勝・奥村友彦

広報委員会 ◎大野友寛 ○根井浩一・水谷幹夫・岩野忠昭

人文会 ホームページ <http://www.jinbunkai.com>

●米軍将兵の滞日経験を明らかにする大作

めぐりあうものたちの群像

戦後日本の米軍基地と音楽 1945-1958

青木 深著

46判・5460円

●「いま」を生きるアメリカ先住民の肖像

写真集 ネイティブ・アメリカ

鎌田 遵著

A4変・3990円

●もしも紙の本がなくなったら、

「活映」の時代がやってくる!!

ポスト活字の考古学

「活映」のメディア史 1911・1958

赤上裕幸「著」

映像文化が活字以後を支える重要なニューメディアになると信じて、その可能性に賭けた、戦前日本の

「活映」運動。満州・東映・ジブリを結ぶ壮大な20世紀メディア史。

四六判並製436頁・3990円



柏書房 東京都文京区本駒込1-13-14
Tel.03-3947-8251〈価格税込〉

東京文京 大月書店 電話03-3813-4651
本郷2-11 3813-4651
www.otsukishoten.co.jp 税込価格

イラク戦争から10年、
いま問われることは――

殺す理由

なぜアメリカ人は戦争を選ぶのか

R.E. ルーベンスティン
小沢千重子訳

戦争は最後の手段か？ ほかに道はないのか？ 戦争が常態化する国の歴史から、集団暴力が道徳的に正当化されてきた要因を探る。年表付。 ▶2625円

紀伊國屋書店

出版部：東京都目黒区下目黒3-7-10
(営業) TEL: 03(6910)0519 表示価格は税込
<http://www.kinokuniya.co.jp/>

知的所有論

高橋一行「著」

二九四〇円

オマーンの国史の誕生

オマーン人と英植民地官僚によるオマーン史表象

松尾昌樹「著」

五〇四〇円

カリタスとアモール

隣人愛と自己愛――

椎名重明「著」

二九四〇円

イエーナ大学講義『超越論的哲学』

フリードリッヒ・シュレーゲル「著」
酒田健一「訳・註解」

八八二〇円

御茶の水書房

〒113-0033 文京区本郷5-30-20 ☎03-5684-0751
<http://www.ochanomizushobo.co.jp/>

—仲正昌樹の入門書—

いまこそハイエクに学べ

〈戦略〉としての思想史

ハイエク独特の思想史を辿ることによって、白にも黒にも収まりの悪いハイエクの思想を分かりやすく紹介。

2100円

いまこそロールズに学べ

「正義」とはなにか

リベラリズムは日本で本当に理解されているのか？ ロールズとその「正義論」を、初学者向けにまとめた一冊。

2205円

春秋社 東京都千代田区外神田2-18-6
☎ 03-3255-9611 (価格に税込)
<http://www.shunjusha.co.jp/>

慶應義塾大学出版会

<http://www.keio-up.co.jp/>

バロックの王国

—ハプスブルク朝の文化社会史 1550—1700 年

R・J・W・エヴァンズ著／新井皓士訳

バロックとカトリシズム興隆の時代へと中欧の姿が大きく変容する17世紀。およそ600年続いたハプスブルク王朝の基礎を築くこの時代の深奥を、中欧歴史研究の碩学、R・J・W・エヴァンズが精緻に描く。

◎9,975円

ベンサム—功利主義入門

フィリップ・スコフィールド 著／川名雄一郎・小畑俊太郎 訳

功利性の原理による立法の科学を構想し、共同体の幸福＝「最大多数の最大幸福」を目指したジェレミー・ベンサムの全貌を平易に解説し、最新の研究成果をもとに彼の功利主義思想を体系的に論じる。

◎3,360円

〒108-8346 東京都港区三田2-19-30 【価格税込】
Tel 03-3451-3584 Fax 03-3451-3122

人間とミジンコがつながる世界認識

私説 ミジンコ大全

坂田 明 著

水棲生物たちに捧ぐ
音楽『海』(CD)を収録

ミジンコの面白さに数十年取り憑かれていたシャズミューシヤンの著者が、飼育観察法はもとより、海洋ミジンコ生態系DNAなどの専門家と対談し、ミジンコの現在を多角的に紹介する。

A5判216頁・2625円



晶文社

〒101-0051 千代田区神田神保町 1-11
Tel.03-3518-4940
<http://www.shobunsha.co.jp>

鈴木 健〔著〕

なめらかな社会とその敵

PICSY・分人民主主義・構成的社会契約論

なめらかな
社会と
その敵



好評6刷

A5判上製276頁
3360円 (価格税込)

複雑な世界を複雑なまま
生きるのは可能なのか？
歴史的な閉塞感に生きる
現代人希望の書！

* 価格税込

勁草書房 TEL 03-3814-6861
FAX 03-3814-6854

〒112-0005 東京都文京区水道2-1-1
<http://www.keisoshibo.co.jp>

苅部直

秩序の夢

政治思想論集

時代の奔流にあらがひ、来るべき時代を見据えて紡がれた政治への思考。丸山眞男、中井正一、和辻哲郎ら思索者たちの軌跡をたどり、隠された可能性を指し示す。

四六判 ● 3780円

筑摩書房

サービスセンター ☎048(651)0053
<http://www.chikumashobo.co.jp/>

子どもへの性暴力

その理解と支援

藤森和美・野坂祐子編 性暴力を受けて悩んでいる子どもをどう理解しどう支援していくかについて臨床心理を中心とした現場の専門家から最新の知見を集めた。2520円

子どもと家族の認知行動療法 ①うつ病

C.ヴァーダイン他著／下山晴彦監訳 子どもが抱えるさまざまな問題への対処法を多数の事例で解説する全5巻シリーズの第1巻目。本書では、うつ病に苦しむ子どもの心と身体への援助法を伝授する。3570円

子ども虐待への挑戦

医療・福祉・心理・司法の連携を目指して 日本子どもの虐待防止センター監修 小児科医として子ども虐待に取り組み道半ばして斃れた坂井聖二の論文集とその意志を継いで心理・法律・福祉領域等で活躍する実践家らによる虐待防止への提言集。3990円

誠信書房

東京都文京区大塚3-20-6
TEL.03-3946-5666(税込)

学問は現実に関わるか

三谷太一郎 政治学者・近代史家として学界をリードしてきた著者ならではの待望の学問論。 2940円

新約聖書・ヘレニズム原典資料集

大貫 隆・筒井賢治編訳 ヘレニズム文化圏から見える、新約聖書の記述の独自性とは――。 3780円

東京大学教養英語読本Ⅰ

東京大学教養学部英語部会編 東大駒場の新英会話カリキュラムから誕生した理想のリーディングテキスト。 1995円

新版 歌舞伎

河竹登志夫 発祥から開場したばかりの新しい歌舞伎座まで、その魅力を綴った決定版入門書。 3150円

クローズアップ 人体のしくみ図鑑

J・克蘭シー著／北川玲訳
191×254ミリ 2,940円 ◆想像を超える体内のかたち、色、300点超の写真を収録。

クローズアップ 自然のしくみ図鑑

G・ス・パロウ著／北川玲訳
191×254ミリ 2,940円 ◆人知を凌駕する自然の神々しさ、驚異の写真が満載。

ブライアン・コックス 宇宙への旅

B・コックス他著／渡辺滋人・中里京子訳
A4判変型 3,360円 ◆137億年を诗情豊かに旅するギャラクシー・ロマン。

地図で読むケルト世界の歴史

I・バーンズ著／鶴岡真弓監修／桜内篤子訳
336×255ミリ 8,400円 ◆124枚の歴史地図で追うケルトの始まりから現在まで。

創元社

大阪市中央区波路町4-3-6(税込価)
Tel.06-6231-9010 Fax.06-6233-3111
東京支店 Tel.03-3269-1051

東京大学出版会

〒113-8654 東京都文京区本郷7-3-1 東大構内
TEL 03-3811-8814 FAX 03-3812-6958
<http://www.utp.or.jp/> (価格税込)

新版●イメージの博物誌 | A5判

タントラ インドのエクスタシー礼賛
フィリップ・ローソン
松山俊太郎 [訳] 1,995円(税込)

聖なるチベット 秘境の
宗教文化
フィリップ・ローソン
森雅秀 森喜子 [訳] 1,995円(税込)

錬金術 精神変容の秘術
スタニスラス・クロソウスキド・ローラ
種村季弘 松本夏樹 [訳] 1,890円(税込)

ミステリアス・ケルト
薄明のヨーロッパ
ジョン・シャーキー
鶴岡真弓 [訳] 1,995円(税込)

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-29
Tel. 03-3230-6574
Fax. 03-3230-6588
<http://www.heibonsha.co.jp/> **平凡社**

■こころの科学叢書■

**子どものそだちと
その臨床** 滝川一廣 著
□2,100円

「そだち」と「おくれ」の見方・考え方の明日をひらく

**リフレーミングの
秘訣** 東ゼミで学ぶ 東 豊 著
家族面接のエッセンス

読めば必ず心理面接がうまくなる、東教授の集中講義。 □1,680円

統合失調症のひろば①

【特集】統合失調症に治療は必要か

杉林 稔・高木俊介・横田 泉・鈴木康一・
小川 恵・工藤潤一郎／編集 中井久夫・
星野 弘・中村ユキ／編集協力 □1,600円

◎日本評論社 表示価格
税込

〒170-8474 東京都豊島区南大塚3-12-4
TEL: 03-3987-8621 <http://www.nippyo.co.jp/>

法政大学出版局

<http://www.h-up.com/>

J. デリダ 著

散 種

藤本一勇・立花史・郷原佳以訳 形而上
学の円環的知を脱構築する四篇のテクス
ト、「書物外」「プラトンのパルマキア
ー」「二重の会」「散種」が織りなすデ
リダの初期代表作、待望の全訳! 6090円

B. スティグレール 著

技術と時間

石田英敬監修／西兼志訳 人間存在の本
質的な危機に挑む哲学者の名著シリーズ。
1 エピメテウスの過失 4410円
2 方向喪失 4200円
3 映画の時間と〈難-存在〉の問題... 4200円

〒102-0073 東京都千代田区九段北4-3-24
☎ 03 (5214) 5540 / 表示価格は税込です

誕生から、革命運動への傾倒、流刑と亡命、レ
ニンとの出会い、十月革命、レーニンの死、スター
リンとの対立、トルコ・メキシコへの亡命、暗殺
されるまでを精細に描く評伝。「20世紀の社会主
義」に二石を投じる、英国の泰斗による注目の大
作! ダフ・クーパー賞受賞作品。 各4200円

トロツキー (上・下)

ロバート・サーヴィス 山形浩生、守岡 桜訳

白水社 東京都千代田区神田小川町3-24
tel.03-3291-7811 / fax.03-3291-8448
<http://www.hakusuisha.co.jp/> * 価格は税込

2013年4月30日発行 年3回発行 第115号

発行所 人文会 みすず書房内

〒113-0033 東京都文京区本郷5-32-21

編集協力 アジュール・プロダクション

印刷 中央精版印刷株式会社

〈非売品〉